
都市計画学会中四国支部都市計画サロン

石川栄耀が見た近代日本都市計画
ー都市広場をめぐる活動を通じてー

香川大学 西成典久

2010/9/18

自己紹介(簡単に)

西成典久(にしなりのりひさ) 東京生まれ

現職: 香川大学経済学部准教授 まちづくり論・景観論担当

専門: 都市計画(社会工学)、景観

研究分野: 都市計画史、景観施策(公共空間の計画論)

博士論文: 「都市広場をめぐる石川栄耀の活動に関する研究」

実践活動: 大分県別府(海岸整備を受けた地域再生事業)
長野県飯山(新幹線駅新設に向けた都市ビジョン策定)
東京月島(運河再生計画と周辺まちづくりプロジェクト)
瀬戸内地域(瀬戸内海の観光資源調査)

現在関わっている事業: 宇多津、丸亀、五郷地区、女木島



今日のテーマ

石川栄耀が見た近代日本都市計画

－都市広場をめぐる活動を通じて－

「『都市計画』という華々しい名前を有ちながら自分達の仕事がどうも此の現実の『都市』とどこか縁が切れてる様な気がしてならない」

石川栄耀(1932),「『盛り場計画』のテキスト－夜の都市計画－」,『都市公論』No.15-8, p.98









「都市はまさに劇場のようである」
(W.H.ホワイト、1988)

「都市の魅力」「都市の楽しみ」とは何か

匿名性を獲得した人々が集まり緩やかなコミュニケーションを楽しむ







今日のテーマ

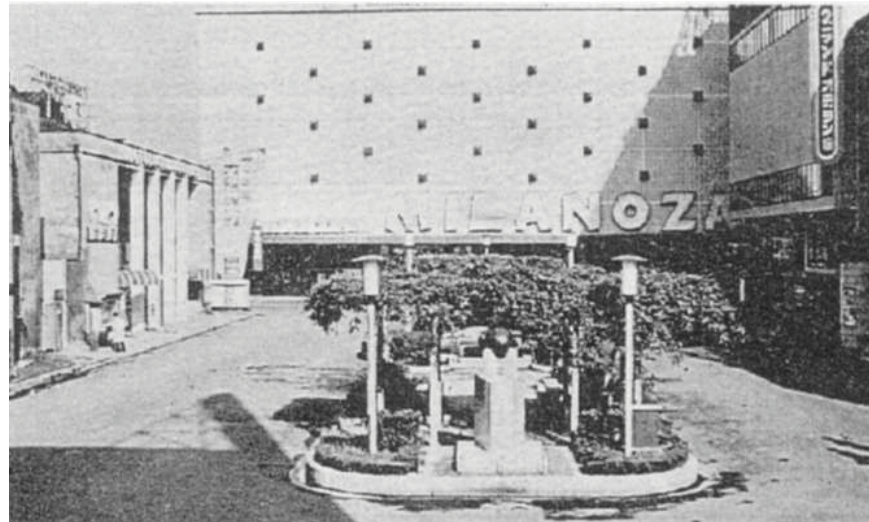
石川栄耀が見た近代日本都市計画

－都市広場をめぐる活動を通じて－

「都市広場をめぐる石川栄耀の活動に関する研究」



石川栄耀(1893－1955)



新宿歌舞伎町の広場(1957年竣工当時)

1-1. 研究の背景

◆ 研究の着想(私の基本的な興味)

日本の都市にとって広場とは何か
また
我々が都市空間に求めている広場とは

「**広場**」の字義 もともとは**単なる広い場所**、開けた場所、広庭

⇒ 歴史を経て、様々な意味を帯びてきた

1-1. 研究の背景

「広場」という言葉 人々は多様な意味を込める

1960年代後半 新宿西口広場

- ・反戦フォーク集会
- ・駅前討論会

体制側

「新宿西口**広場**」⇒「新宿西口**通路**」

名称を変更することで集会を規制



新宿西口広場名物 反戦フォーク集会
(1969年5月25日朝日新聞)



「広場か通路か」新宿駅西口論争
(1969年7月24日朝日新聞)

※拙稿(2005)「新宿西口広場の成立と広場意識」都市計画学会

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

1-1. 研究の背景

都市計画のなかでの「広場」

1919年制定 旧都市計画法 第16条

「道路、**広場**、河川、港湾、公園其ノ他勅令ヲ以テ指定スル施設ニ関スル都市計画事業ニシテ…」

1968年制定 都市計画法 第11条(都市施設)2

「公園、緑地、**広場**、墓園その他の公共空地」

広場は道路や公園と同様、都市空間を構成する**都市施設**として位置づけられている

都市施設	公物管理法
道路	道路法
公園	都市公園法
広場	該当なし

広場には独自の事業が成立せず、
行政的に市民権を得ていない言葉である

都市計画のなかで広場は明確に定義されていない

1-1. 研究の背景



ヴェネチア(イタリア)のサンマルコ広場



イタリアの地図黒白逆転



古板江戸図黒白逆

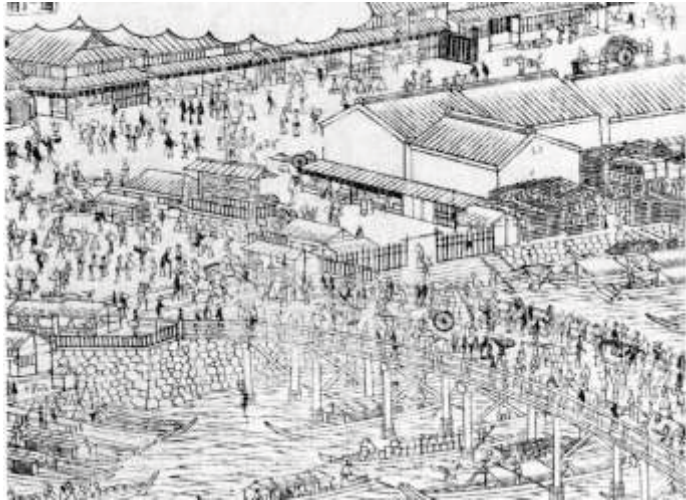
(三浦金作「広場の空間構成」1993より)

近代以前、我国では西欧広場のように明確な**空間形態**をもつ“広場”を持たなかった

・羽仁五郎「都市の論理」1968
・都市デザイン研究体「日本の広場」1971
など日本の広場に関する様々な研究から

- ・ 日本には市民革命を経た「**市民社会**」なる伝統がない
- ・ イタリア人と日本人の間に空間領域の認識の違いがある
- ・ 気候の違い、石の文明と木の文明

1-1. 研究の背景



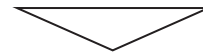
近世江戸の河辺(日本橋)

一方で、

人々の日常的な交歓の場
日本においては“道”が補完してきた

という意見も一般的にある。

上田篤「ラビリンスの都市」1983
土肥真人「江戸から東京への都市オープンスペースの変容」1994等



“広場”の捉え方

形

使われ方

しかし、近代をむかえ

日本の都市にも中高層の建築物が立ち並び
西欧広場の“空間形態”に良く似た空地が創出されるようになった。

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章



銀座歩行者天国



自由が丘



新宿駅東南口周辺



新宿サザンテラス

1-1. 研究の背景

新宿歌舞伎町にある広場

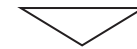
- ・繁華街の中心にあり、四周を建物で囲まれた空間
- ・西欧広場の空間形態と似ており、日本では珍しい空間



新宿歌舞伎町の広場(1970)

戦災復興期

石川栄耀によって計画的につくられた



石川はなぜ日本にはないような
広場(空間)をつくったのか

ここに本研究の基礎的な興味がある

1-1. 研究の背景

石川栄耀(1893－1955)

- ・旧都市計画法の内務省都市計画技官
- ・日本の都市計画成立期を支えた人物

石川に対する評価

- ・戦前戦後通じた都市計画界のイデオログ
- ・ロマンチスト、ユニークな都市計画家



石川栄耀(1893－1955)

⇒ 都市計画技官としての華々しい業績の一方で、

「『都市計画』と云う華々しい名前を有ちながら自分達の仕事がどうも此の現実の『都市』とどこか縁が切れてる様な気がしてならない」^[1]

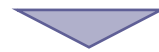
都市計画技官としての本務 ← 自ら否定
日本のあるべき都市計画の姿を追い求めた人物

^[1] 石川栄耀(1932),『『盛り場計画』のテキスト―夜の都市計画―』、『都市公論』No.15-8, p.98

1-1. 研究の背景

- ◆ 石川の都市計画のテーマ 「隣保」「親和」「友愛」というキーワード
「隣保」とは、「人と人のつながり、交際、人つきあい」

「盛り場」や「広場」に着目し、「人と人のつながり」を最大のテーマとした。



しかし、従来の評価 「ロマンチックな人だった」「ユニークな人だった」
彼自身の個人的な人間性に帰することでその評価がなされがちだった。

⇒ 我国の都市を取り巻く環境は大きく変化

1-1. 研究の背景

現代を振り返って

石川は、「隣保」「親和」など、いわゆる「**社交**」(人と人のつながり)を都市の本質と捉え、これをいかにつくっていくかを都市計画のテーマとした。

「社交」を取り巻く問題は、現代都市においても表出している。

◆ 例えば、**中心市街地衰退**の問題

空き店舗にはシャッターが降り、祭りなどが開催されなくなるなど、**コミュニティの衰退**が問題視されている



1-1. 研究の背景

諸外国の動き(アメリカ)

◆ ニューアーバニズムという新たな開発手法

郊外都市が生まれ、中心市街地が空洞化しスラム化した。

⇒ コミュニケーションを促進しコミュニティの力を再生させる試み



解決手法例

- ・ 住宅を密集させる
- ・ 狭い路地をつくる

積極的に人と人のつながりをつくっていくという明確な方向性が確認できる

1-1. 研究の背景

石川が都市計画のテーマとして掲げていた「人と人のつながり」

⇒ 現代的課題と重なり、近年、石川の再評価が進んでいる

石川は「人と人のつながり」をつくる手法として広場に着目した。

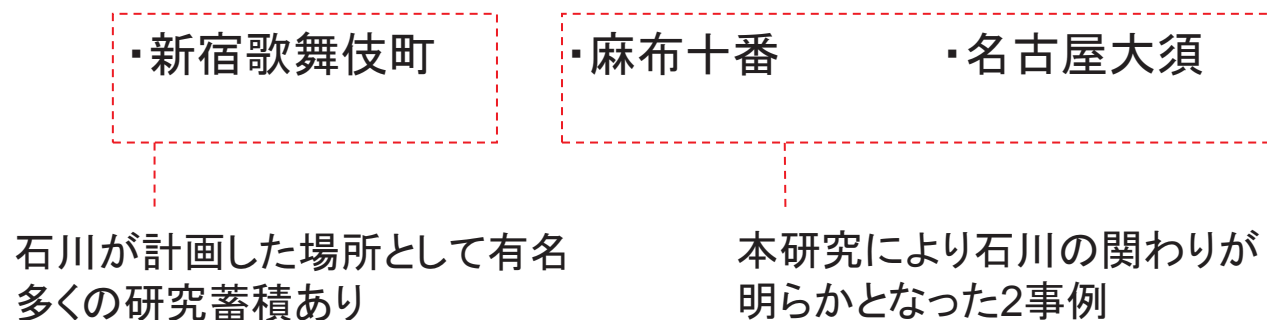
その実践の代表例として挙げられるのが新宿歌舞伎町の広場である。



コマ劇前広場1957年頃(新宿歌舞伎町)

1-1. 研究の背景

◆ 本研究で着目する石川栄耀の実践活動



本研究では歌舞伎町同様の試みを**新たに2事例発見した**。
これらの事実は、これまでの研究でほとんど言及されてこなかった。



一体、石川は「**人と人のつながり**」をテーマにどのような活動を行ったのか。

我国の都市計画のあるべき姿を追求した石川の狙いと実践について、
いまいちど見直す意義は少なくともあると考える。

2章

石川栄耀の都市計画活動と3つの広場創出事例

2章 石川栄耀の都市計画活動と3つの広場創出事例

目的

- ① 石川の都市計画家としての活動を概観する
- ② 3つの広場創出事例が石川の都市計画活動のどこに位置するのかを把握する

⇒ 石川栄耀の活動年譜参照(A3配布資料)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

2-1. 都市計画家・石川栄耀(1893-1955)の活動

簡易年表

1893 年	山形県尾花沢町に生まれる	(生い立ちから学生時代)	生い立ちと学生時代 (1893-1920)
1918 年	東京帝大土木工学科卒		
1920 年	内務省採用、都市計画委員会技師、都市計画名古屋地方委員会赴任	(名古屋時代)	名古屋技師時代 (1920-1933)
1923 年	1 年間の欧米視察旅行 イギリス、アメリカ、ノルウェー、フランス、オーストリア、オランダ		
1925 年	上田市の都市計画を提案、既存商店街の扱いで失敗し、商店街の存在に関心を持つ 都市計画専門雑誌『都市創作』創刊(1925-1930)全 55 冊		
1933 年	都市計画東京地方委員会赴任	(東京時代)	東京時代 (1933-1951)
1940 年	大東京地区計画を発表		
1943 年	東京都計画局道路課長就任、6 号環状線等の実現をめざす		
1944 年	東京都計画局都市計画課長兼務、東京の復興計画の研究に着手、隣保地区計画を作成		
1945 年	帝都再建方策発表		
1946 年	帝都復興計画概要案発表、復興街路、区画整理区域等計画決定		
1948 年	東京都建設局長就任		
1951 年	日本都市計画学会設立、初代副会長に就任、早稲田大学理工学部教授に転任	(早稲田大学教授時代)	早稲田大学教授時代 (1951-1955)
1955 年	永眠。62 歳。		

4つのライフステージ

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3章

新宿歌舞伎町の広場再考(事例研究その1)

3章 新宿歌舞伎町の広場再考(事例研究その1)

目的 石川の言説と、コマ劇前広場およびその周辺空間との関連を精査する事により、その**実践内容**を明らかにする

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

- ・広場に対する考え(思想的背景)
- ・広場の空間計画論(技術的観点)

3-2. 新宿歌舞伎町の広場概要

3-3. 新宿歌舞伎町およびコマ劇前広場の計画内容

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

データソース:

石川の全著書(単著)及び主要論文

広場及び都市設計に関する言説を抜き出したものを使用する。

- (1) 広場に対する考え(思想的背景)
- (2) 広場の空間計画論(技術的観点)

年月	著書・雑誌名	論題
1925-26年	都市創作 1巻3,4号 2巻 1号	郷土都市の話になる途 断章の2夜の都市計画
1929年 1月	商店界 9巻 1号	夜の都市美 散歩街の研 究
1930年 2,3月	都市問題 11巻 2,3号	夜の盛り場の種々層
1932年 8月	都市公論 15巻 8号	「盛り場計画」のテキスト ー夜の都市計画ー
1935年 3-5月	エフジニア 14巻 3-5号	盛り場の研究
1935年 8月	小売業改善資料 7号	「商店街盛り場」の研究及其 の指導要項
1938年 10月	商業経営指導講座第1巻	商店街の構成
1941年	日本国土計画論	国土計画と商店街
1942年	国土計画ー生活圏の設計	
1943年	都市の生態	盛り場風土記
1944年	全国都市の建設	都市生活圏論考ー特に盛 り場現象についてー
1946年	新首都建設の構想	復興商店街読本
1946年	都市復興の原理と実際	帝都改造計画の構想
1948年	私達の都市計画の話 (中学社会科副読本)	
1951年	都市美と広告	都市美的盛り場作法
1953年	都市 (社会科全書)	
1953年 6月	商業診断参考シリーズ1	都市計画的に見た商店街 盛り場の計画と研究
1954年	新訂都市計画と国土計画	
1956年	首都物語	
1956年	余談亭らくがき	

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)



Cuzcoの遺跡(石川栄耀「世界首都ものがたり」1956より)



余談亭らくがき(1956)

言説1: 『この余りにも有名な世界に絶縁し、独自の文明を以って発展していたという国の首都(Cuzco)に、広場があったという事である。(略)我々は都市計画史において、都市生活が高度な段階に入り、**市民生活が民主的に社会的に高揚されてきた時、必ずその媒体として広場を見る事になっている。いわば広場は、その都市の文化度の表象のようなものになっている事を知っている。**』

(余談亭らくがき 1956 p30)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

言説2: 『インカにさえあった、この社会的に経済的に効用の高い広場がナゼ日本の都市に無かったか。～(略)結局何となく日本人には本質的に都市をつくる社会感覚が欠けているので、広場を持っていないのであるような気がして淋しいのである。』p32

言説3: 『広場のある都市と、広場のない都市とがお互いにどういう意味を持つのか解らない。友愛のあるところに広場あり、広場は民主社会のレッテルであるように思える。日本にそれがないことは淋しすぎる。何となく日本人の性格の中に民主主義が無いことを意味するように思えるからである。』p276

言説1, 2, 3から

石川栄耀の広場の捉え方

「広場」は民主社会の表現であり、
文化の進んだ都市が持っている

⇒ 広場のない日本は諸外国に比べ遅れている

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

◆ 日本が諸外国に比べ遅れているということ

『日本には西洋都市計画のベースともなるべき「広場と都市美の時代」
約2,500年が抜けている。この不幸を何によってとりかえすべきか。』

(新訂都市計画と国土計画,1949 P3)

『我々のねらひは、東京を友愛の都市にしたい事である。(中略)自分は都市計画二十年—その間常に此の廣場を提唱して止まなかった。廣場こそは友愛。廣場こそは都市の精華である。』

石川栄耀(1946),「理想の首都」,『日本週報,第30・31合併号』より

日本の都市が歴史的に友愛の都市計画をしてこなかった事

⇒ 今後の都市計画における第一の問題点

一方で、『日本で広場をつくっても、果たして育つんだろうか』

石川栄耀(1947),「美しい町」,『新文庫』No. 1-2より

という疑念を同時に抱いていた

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

◆ 石川のいう「広場」とは

『パリに端を発したベルサイユ風の緑と彫刻の
広場は、単なる都市の**装飾物に過ぎない**』

石川栄耀(1956),「余談亭らくがき」

『(日本の)駅前広場は**交通連絡施設**であって、
真の社会的な民主的な**広場**ではない』

石川栄耀(1956),「余談亭らくがき」

⇒

広場に**社会交歓**の要素があって
初めて石川の言うところの「**広場**」を意味するのである。



ベルサイユ宮殿の庭園



戦前の新宿駅西口広場

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

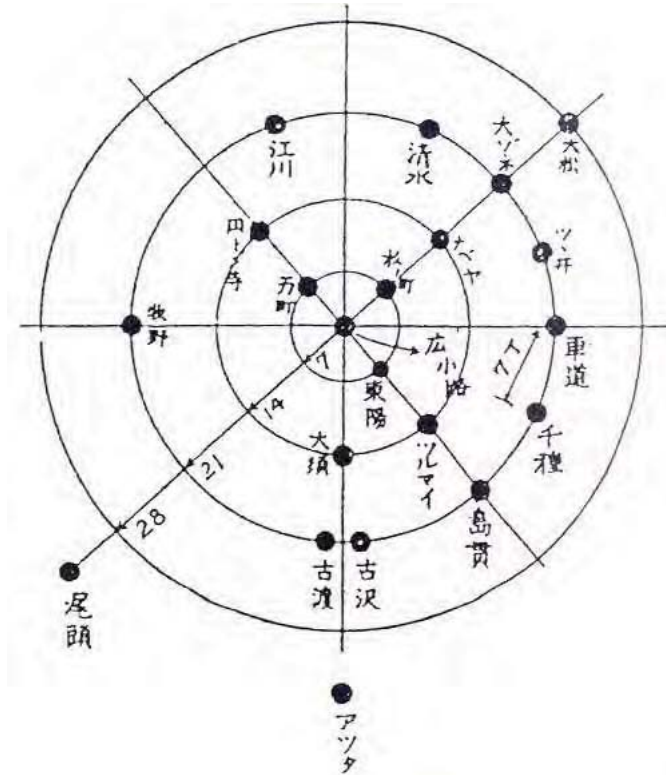
◆ 日本における社会交歓

『ある時夜の街を歩いて見てそこに、
商店という盛り場が一定の距離で燦
然と明るく輝いている事に気がついた。

～(略)

そして市民はおあつらえ向きにその
盛り場に集まって、何という特別の目
的もなく交歓している。**これなら広場
がなくとも一応許せる。』**

(「都市の生態」1943 p76)



名古屋の盛り場配置

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

『日本の商店街は、ただの商品売場ではない。**広場のない都市に育った日本人**が、タクマズして造り上げていた社会中心が、**盛り場**であったのである。』

(「余談亭らくがき」1956 p61)



フィレンツェのドゥオーモ広場の人々

=



名古屋の大須商店街の人々

空間形態ではなく社会的機能（市民交歓）において

西欧の**広場** = 日本の**商店街**

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

(1) 広場に対する考え(思想的背景)

＜石川の広場に対する考え＞

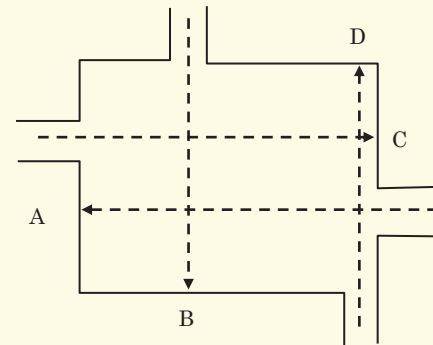
- ①広場は文化の進んだ都市、市民生活が民主的に高揚された都市が持っており、石川はそれが日本にないことを嘆いていた。
- ②日本の都市が歴史的に友愛の都市計画をしてこなかった事を指摘し、今後の都市計画において第一の問題点として認識していた。
- ③広場こそ都市の精華であるとしながらも、日本に広場をつくっても果たして育つのだろうか、という疑念を抱いていた。
- ④石川が重視していた広場は、駅前広場のような交通のための広場ではなく、人と人のつながりを促すような社会交歓のための広場である。
- ⑤一方で、西欧広場の重要な社会的機能である市民交歓は、日本においては商店街がその機能を補完してきたという考えを持っていた。

3-1. 石川栄耀の広場に関わる言説分析

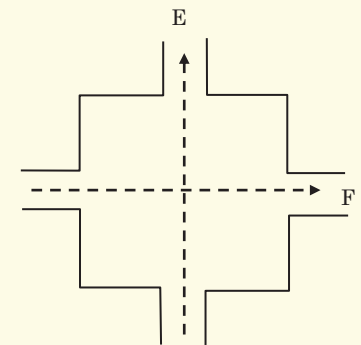
(2) 広場の空間計画論(技術的観点)

i .広場設計論(広場自体の設計論)

Terminal vista端景の構成



Terminal vistaを形成



Terminal vista形成せず

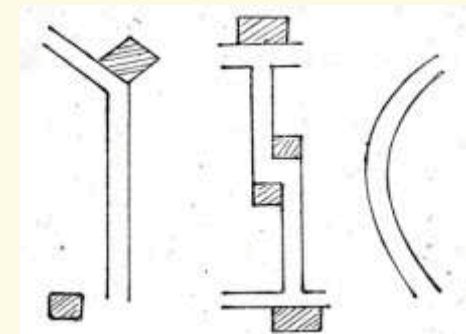
ii .広場周辺の空間計画論(盛り場計画論)

①街路パターン

- ・広場、広小路のあること
- ・T字路『字路乃至曲線道路のあること(街景封鎖)

②土地利用

- ・街路の土地利用が機能分化されていること
- ・車行の危険のないこと



街景封鎖の例
T字路『字路乃至曲線道路によって
視野を封じる手法。

3-2. 新宿歌舞伎町の広場概要

(1) 新宿歌舞伎町の広場誕生の背景と経緯

1945年4月この地区は焼け野原となった。当時、町会長である鈴木喜兵衛が中心となり、「道義的繁華街」をつくろうと自主的な復興事業を始める。



鈴木喜兵衛著「歌舞伎町」1955

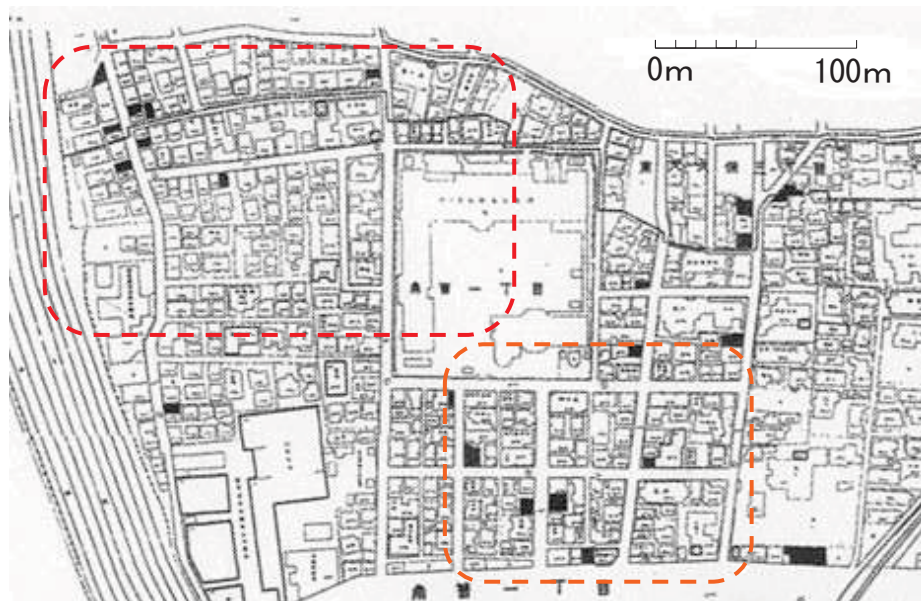


設立当時の歌舞伎町広場(1951～1955年)

東京都の都市計画課長であった石川栄耀は、鈴木喜兵衛からの相談に応じ、数ヶ月の時間を費やして復興計画を検討した。

3-2. 新宿歌舞伎町の広場概要

(2) 区画整理前と後の比較



1935～37年頃 区画整理前



1955～60年頃 区画整理後
(「新宿区の民俗」1993より)

区画整理前 「貧乏人が肩を寄せ合って生きている灰色に煤けた街だった」

木村勝美(1986), 「新宿歌舞伎町物語」より

従前の街路はほとんど踏襲せず、**新たな意図**を持って街路パターンが整備された

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-2. 新宿歌舞伎町の広場概要

(3) 歌舞伎町の計画図と実施図

計画図： 石川栄耀が作成

(鈴木喜兵衛「歌舞伎町」1955などから)

◆ 計画図が変更された背景

GHQの**建築統制**が主な原因

◆ 主な変更点

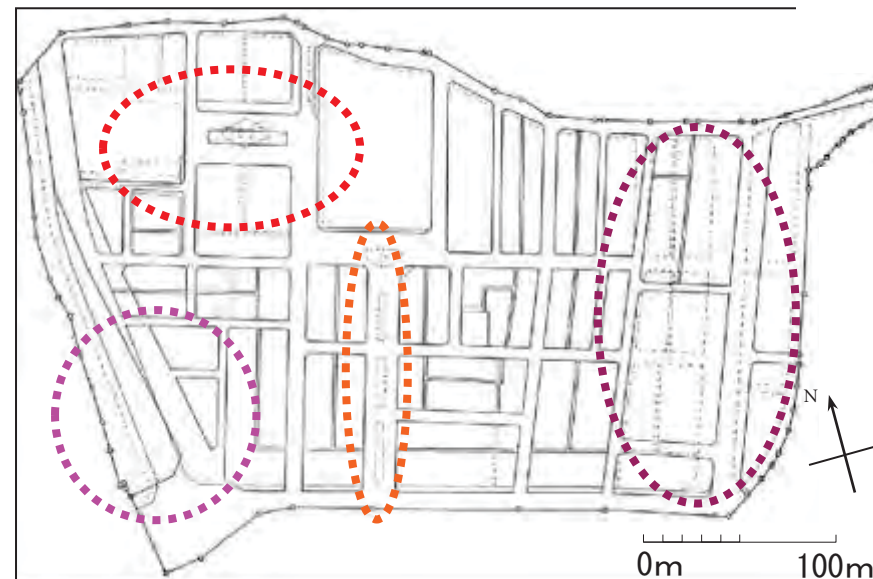
- ・地区西南部の都市計画道路
- ・地区東部の区画割り変更
- ・広場付近の変更

広場付近の変更は石川の広場
設計論と**乖離**を生んだ

⇒ 次節にて述べる



計画図



実施図

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

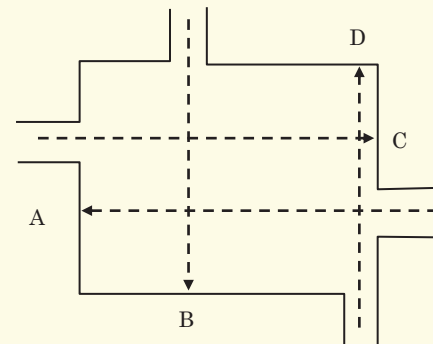
8章

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

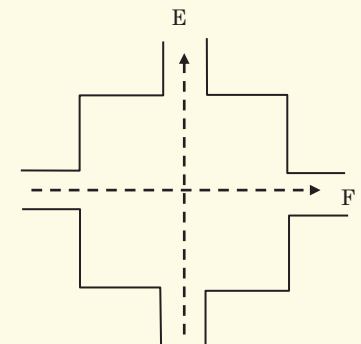
石川の空間計画論と図面の相互比較

(1) 広場設計論(広場自体の設計論)

Terminal vista端景の構成



Terminal vistaを形成



Terminal vista形成せず

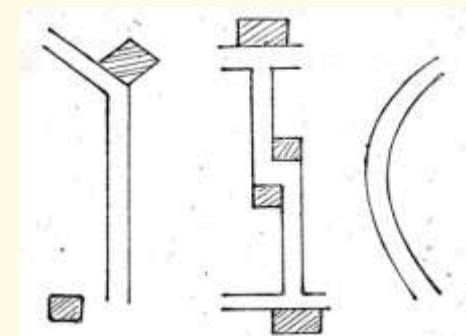
(2) 広場周辺の空間計画論(盛り場計画論)

① 街路パターン

- ・広場、広小路のあること
- ・T字路『字路乃至曲線道路のあること(街景封鎖)

② 土地利用

- ・街路の土地利用が機能分化されていること
- ・車行の危険のないこと



街景封鎖の例
T字路『字路乃至曲線道路によって
視野を封じる手法。

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

(1) 広場設計論との比較

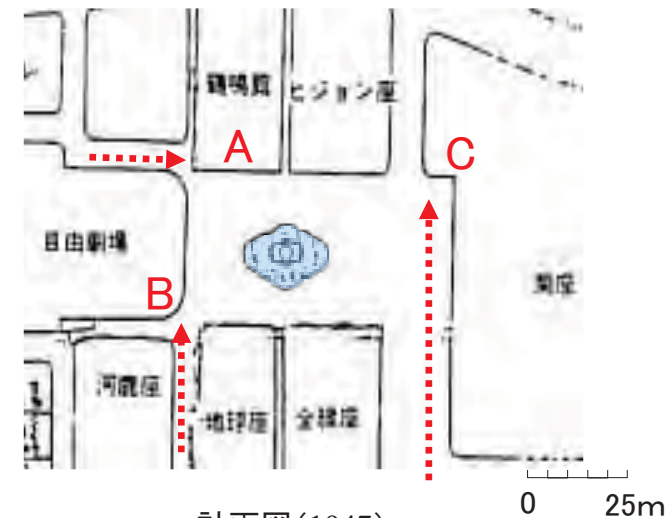
◆ 計画図の設計手法

⇒ 少なくともTerminal vistaが意識されている。

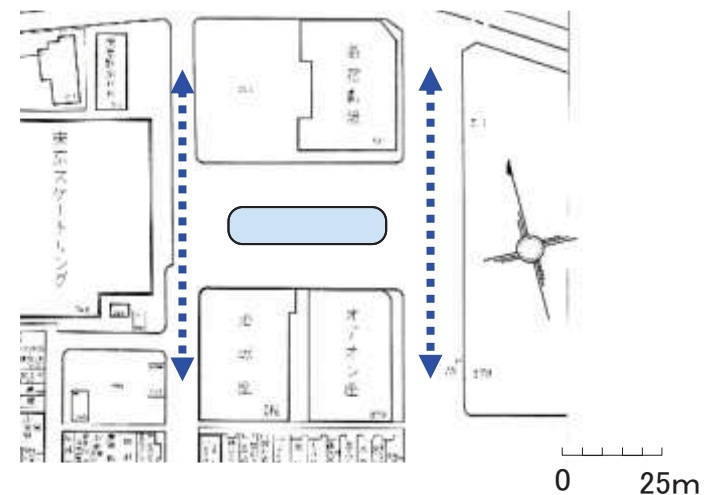
◆ 計画図から実施図への変更点

- ・Terminal vistaが形成されなくなった。
- ・噴水が帯状の島に変更された

『出だしのイキサツは過去現在未来の歌舞伎町の姿に大きな影をもっている。(略)総てもう1, 2ヶ月の夢である所へ来たのが青天のヘキレキ建築統制である。』(鈴木喜兵衛「歌舞伎町」1955)



計画図(1947)



実施図(1954)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

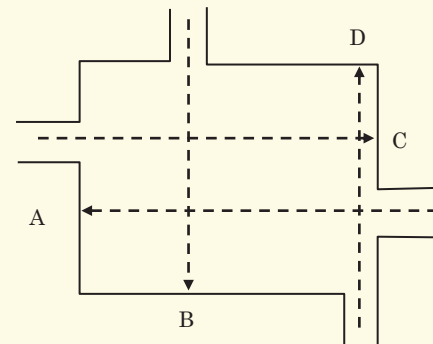
8章

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

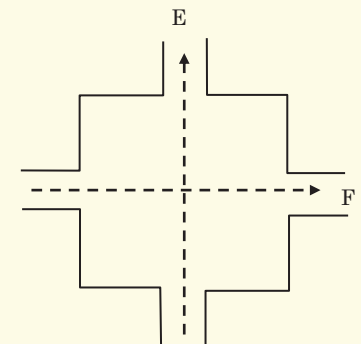
石川の空間計画論と図面の相互比較

(1) 広場設計論(広場自体の設計論)

Terminal vista端景の構成



Terminal vistaを形成



Terminal vista形成せず

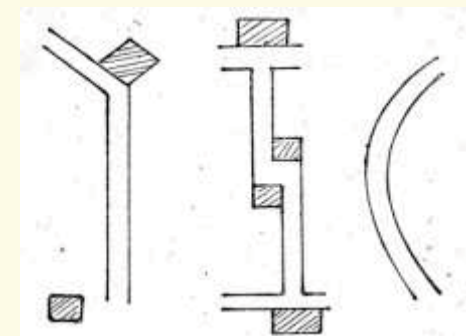
(2) 広場周辺の空間計画論(盛り場計画論)

① 街路パターン

- ・広場、広小路のあること
- ・T字路『字路乃至曲線道路のあること(街景封鎖)

② 土地利用

- ・街路の土地利用が機能分化されていること
- ・車行の危険のないこと



街景封鎖の例
T字路『字路乃至曲線道路によって
視野を封じる手法。

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

(2) 広場周辺の空間計画論(盛り場計画論)との比較

①街路パターン



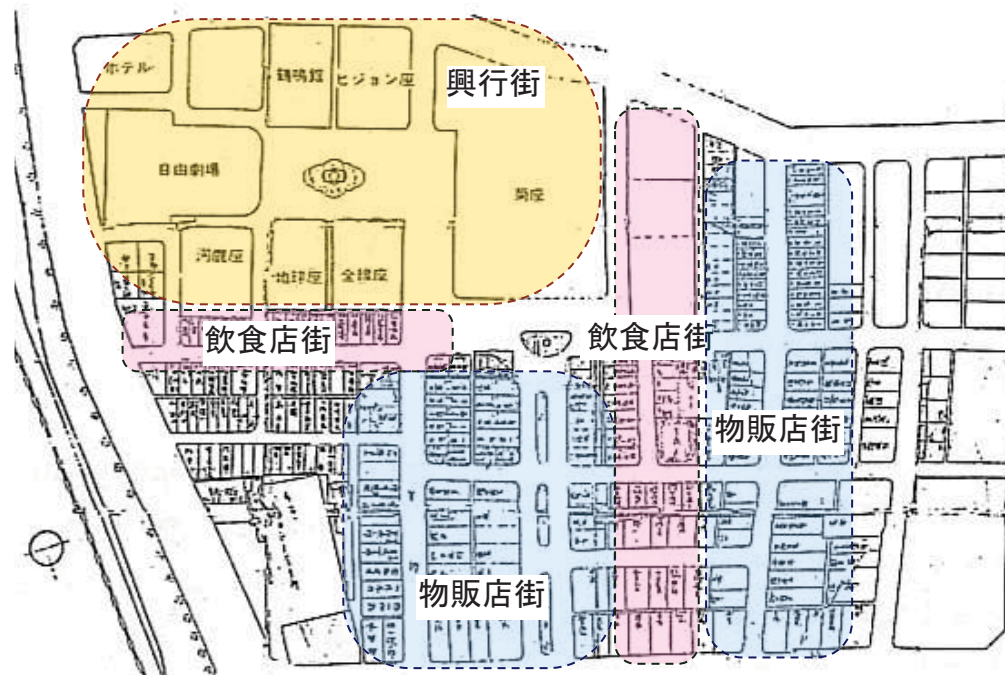
⇒ 「**包まれた感じ**」になるための仕掛けがなされている (**街形封鎖**)

⇒ 実施図においても大きな変更はない

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

(2) 広場周辺の空間計画論(盛り場計画論)との比較

②土地利用



歌舞伎町計画図

⇒ 業種構成を変えることで客の購買心理を高める計画内容であった

⇒ 広場周囲にのみ映画・劇場を配する構想は実現した

3-3. 新宿歌舞伎町および広場の計画内容

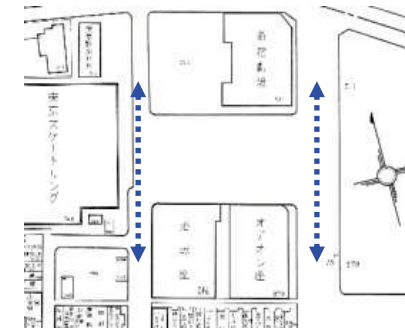
(3) 石川の言説比較からみた歌舞伎町の計画内容

i. 広場設計論との比較

- ・視野を封じる工夫
- ・実施図では変更された



計画図(1947)



実施図(1954)

ii. 広場周辺の計画論(盛り場計画論)との比較

- ①街路パターン
 - ・広場の創出
 - ・街景封鎖
- ②土地利用
 - ・広場と街路の機能分化

⇒ それぞれ工夫あり、実施図でも変更なし



街路パターン比較図

3章の小括

- ・石川の広場に対する考えや空間計画論を整理した。
- ・歌舞伎町における実践内容(対象地区経緯、石川の関与、計画内容)を明らかにした。

ポイントは

- ① 西欧の広場と日本の盛り場に共通性があることを見出したこと
- ② その認識のうえで、歌舞伎町という新設される盛り場に広場をつくった
- ③ 歌舞伎町は街路パターンや土地利用など石川の理想に近い計画内容だった
- ④ 実施図への変更により、広場の設計に込めた石川なりの工夫は実現しなかった

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7章

石川栄耀の原点と思想的背景

7章 石川栄耀の原点と思想的背景

石川は何故このような広場創出活動を行ったのか、本章では、あらためて石川の**原点**や**思想的背景**を探ることで、より深く石川の活動を考察する。

- 目的**
- ① 石川の広場設計の原点とオリジナリティを探る。
 - ② 石川の広場創出活動の狙いと思想的背景を探る。

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

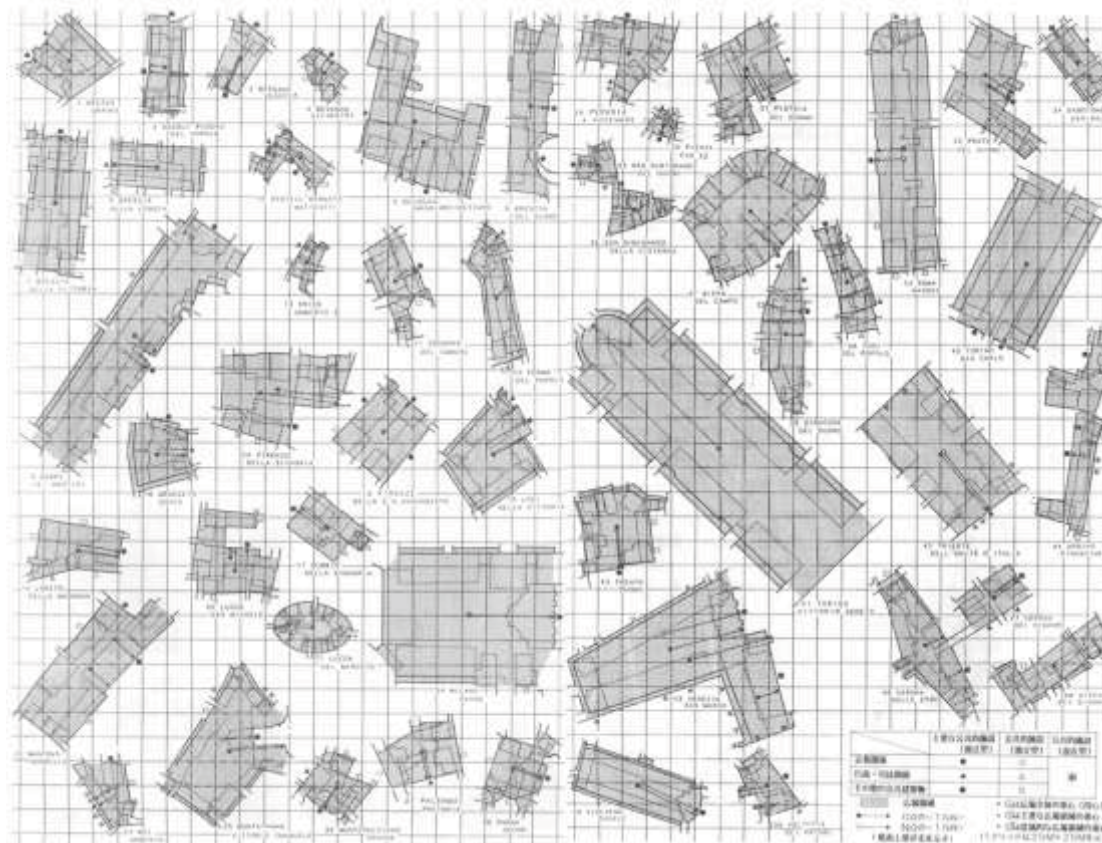
- ・西欧広場との比較
- ・日本盛り場から得たもの

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(1) 西欧広場とのスケール比較

三浦によるイタリア43都市50事例を対象とした広場スケール分析の結果を用いる。



イタリアの広場50事例のセイム・スケール・プラン



31m × 73m
2263m²
1 : 2.35

歌舞伎町広場(実施図)



37m × 76m
2812m²
1 : 2.05

歌舞伎町広場(計画図)



25m × 70m
1750m²
1 : 2.8

麻布十番広場(実施図)



11m × 22m
242m²
1 : 2

名古屋大須広場(実施図)

石川の広場セイム・スケール・プラン

三浦金作(1993),「広場の空間構成」より

1章

2章

3章

4章

5章

6章

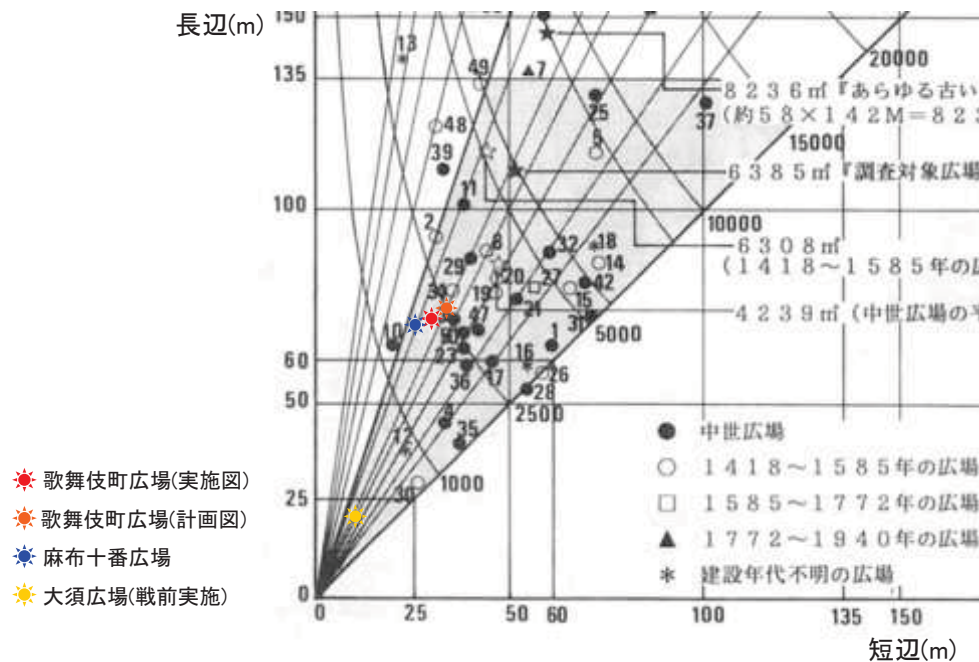
7章

8章

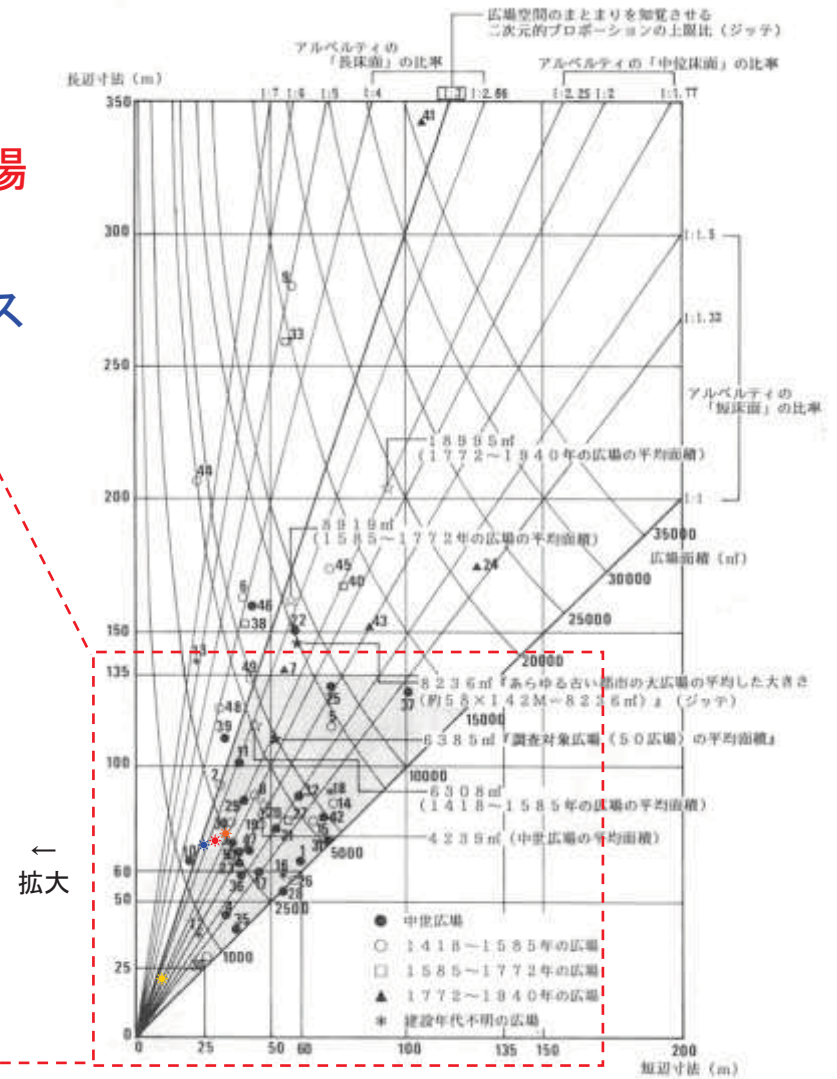
7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(1) 西欧広場とのスケール比較

- 歌舞伎町、麻布十番の広場はイタリア中世広場と同等のスケールであることがわかった。
- 大須の広場はイタリアの著名な広場にはないスケールであることがわかった。



- ★ 歌舞伎町広場(実施図)
- ★ 歌舞伎町広場(計画図)
- ★ 麻布十番広場
- ★ 大須広場(戦前実施)



1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(2) C.ジッテの西欧広場2つの原則との比較

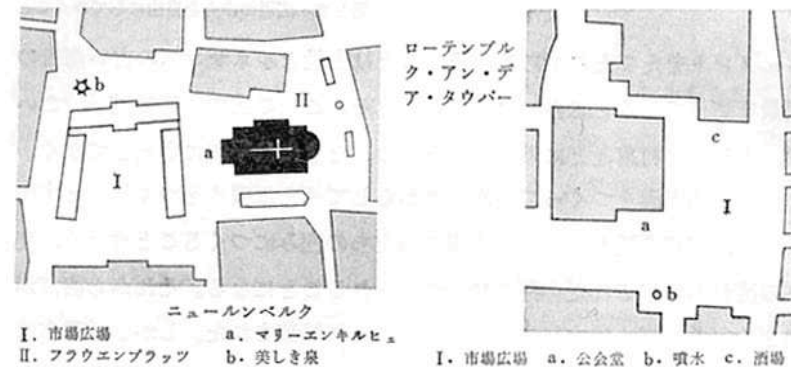
i. 広場の中央が自由である事

広場の**幾何学的中心**にモニュメントや噴水が何の疑いもなく設置される事

↑ ジッテは**批判**

ルネサンス以前の広場を再評価した

C.ジッテ(1983)「広場の造形」(原著は1889年)より



噴水が広場の中央に置けない例

◆ 石川の広場との比較

広場中央に
何らかの**施設あり**



項目	歌舞伎町広場	麻布十番広場	大須広場
計画案	噴水	(計画案なし)	広告塔
実施案	交通島	車道	(用地は取得)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

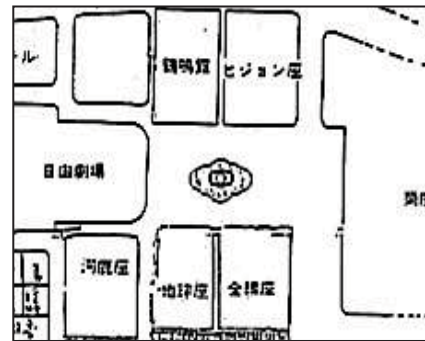
7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(2) C.ジッテの西欧広場2つの原則との比較

◆ モニュメント配置に関する考察

歌舞伎町の計画図

- ・噴水は自由劇場の軸上
- ・広場の中央部に位置



歌舞伎町広場(計画図)



サン・カルロ広場(17世紀)

⇒

このような配置は、西欧広場でいえば**バロック以降**に見られるようになった。



歌舞伎町の広場(竣工当時1950年頃)



駐車場化する歌舞伎町の広場(2002年)

実施図では広場中央部に
アイランドが設置された

⇒ 結果的に

車の進入を容認する
空間構成となった

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

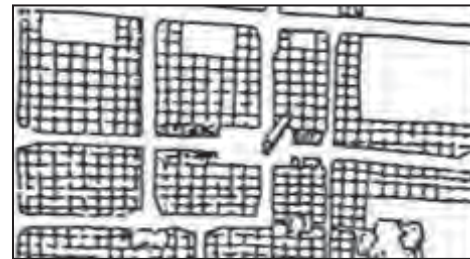
(2) C.ジッテの西欧広場2つの原則との比較

◆ モニュメント配置に関する考察

大須広場の計画図

- ・ 広場に貫入する**街路の視軸上**に**広告塔**が配置されている。

街路の視軸上にモニュメントを配置する手法は、西欧広場では**バロック以降**にみられる
(例えばバロック初期のポポロ広場)



大須広場(計画図)



ポポロ広場のオベリスク



ポポロ広場(17世紀)

P.ズッカーによれば、バロック以降、**広場は都市の支配階級の権力の象徴として利用**され、**審美的効果の追及と形式化**が進んだとしている。

→ この歴史的な事実はジッテの批判ともつながる

大須では**権力の象徴**ではなく、**審美的効果を狙い**として**広告塔**が設置されたといえる

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(2) C.ジッテの西欧広場2つの原則との比較

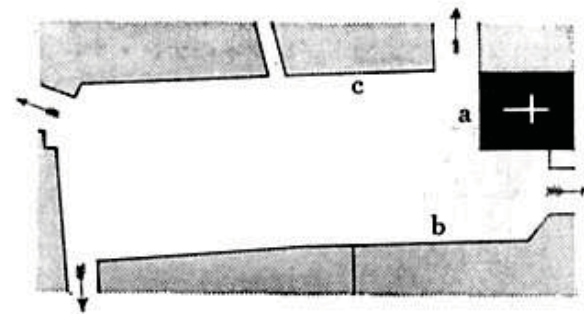
ii. 広場が閉ざされているということ

道路計画が先行し、広場に道路が何のためらいもなく貫通している事

↑ ジッテは**批判**

広場からの**視線の抜けを防ぐ工夫**を発見

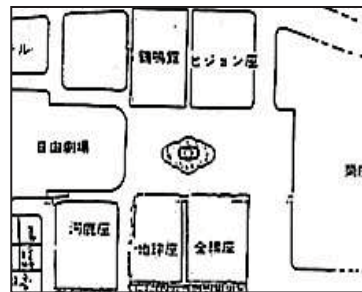
C.ジッテ(1983)「広場の造形」(原著は1889年)より



広場が閉ざされたように見える工夫

◆ 石川の広場との比較

視線が抜ける事を防ぐための工夫が見出せる



項目	歌舞伎町広場	麻布十番広場	大須広場
計画案	1本の道路貫通 (ただし幅員を狭めている)	計画案なし	2本の道路貫通 (ただし広告塔によって封閉)
実施案	2本の道路貫通	1本の道路貫通 (ただし既存街路)	2本の道路貫通 (ただし広告塔によって封閉)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(2) C.ジッテの西欧広場2つの原則との比較

◆ 視線の抜けを防ぐ工夫

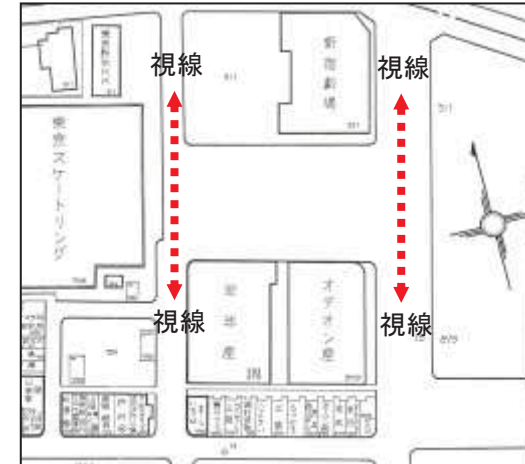
歌舞伎町計画図では
幅員を狭くする工夫があった
(また、**入隅**を形成している)



実施では道路が2本貫通した



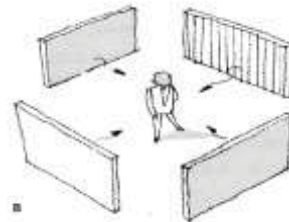
歌舞伎町の広場(計画図)



歌舞伎町の広場(実施後1954年)



低
閉鎖性



高
閉鎖性

空間の閉鎖性

図A,B,Cは空間の閉鎖性の3段階を示す。図Cのように**四隅が入隅によって構成された空間**が最も閉鎖性が高い。

芦原義信(1975)
「外部空間の設計」より

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(3) 我国の盛り場の空間構成から得たもの

西欧広場のみならず、日本盛り場の空間構成からも広場設計のヒントを得ていた

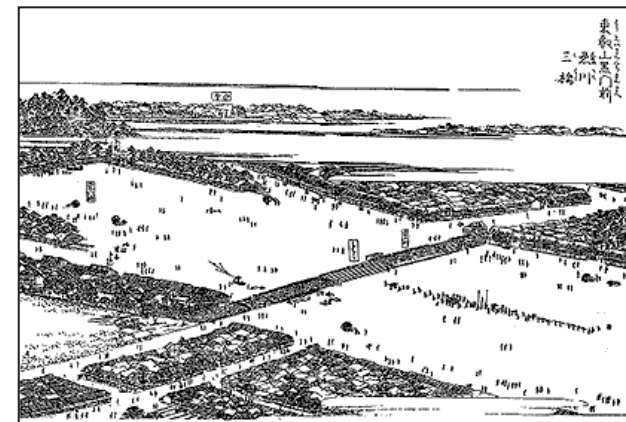
「江戸盛り場はよく廣小路(廣場の変形)に出来て居ります。上野然り、両国然り、浅草然り、筋違橋にしたとこで付近一帯は廣小路形になって居ります。」

石川栄耀(1935)『『商店街盛場』の研究及其の指導要項』より

「考へて見れば浅草の観音様にしても名古屋の大須の観音様乃至伊勢の津の観音様にしても、結局その境内が夜店を入れて、一種の広場としての働きをやるのに大きなご利益があるのではないのでせうか。」

石川栄耀(1935)『『商店街盛場』の研究及其の指導要項』より

石川は境内や火除地といった空地のあることが盛り場を構成するうえで極めて重要な要素であることを指摘する。



上野広小路(江戸の代表的盛り場)

1章

2章

3章

4章

5章

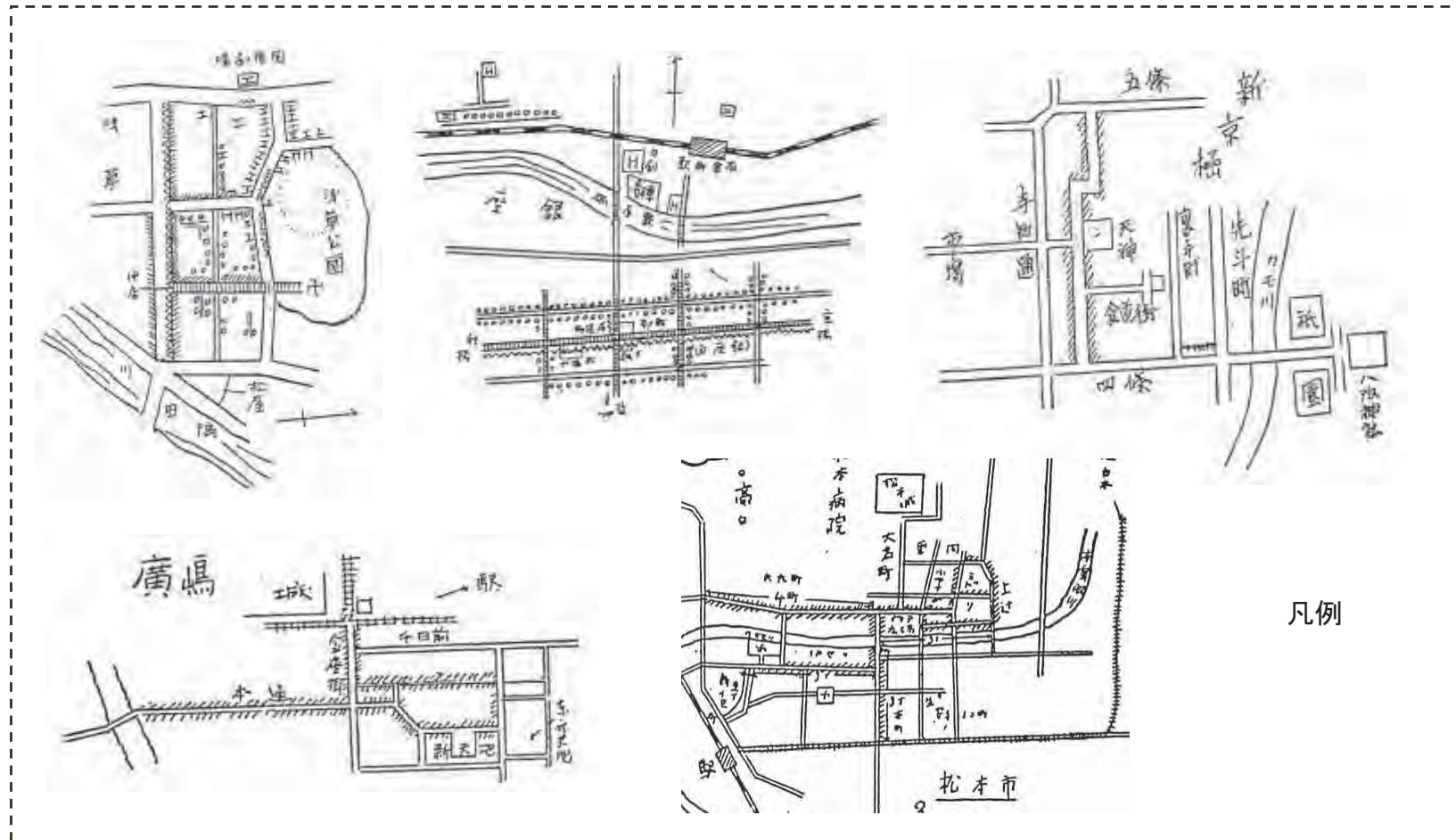
6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(3) 我国の盛り場の空間構成から得たもの



石川栄耀の盛り場スケッチの一部 「盛り場風土記」、『都市公論』(1938)より

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

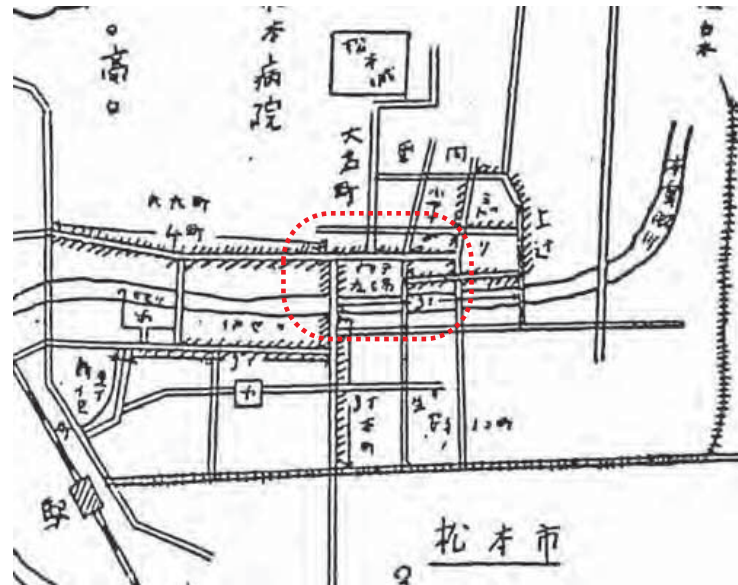
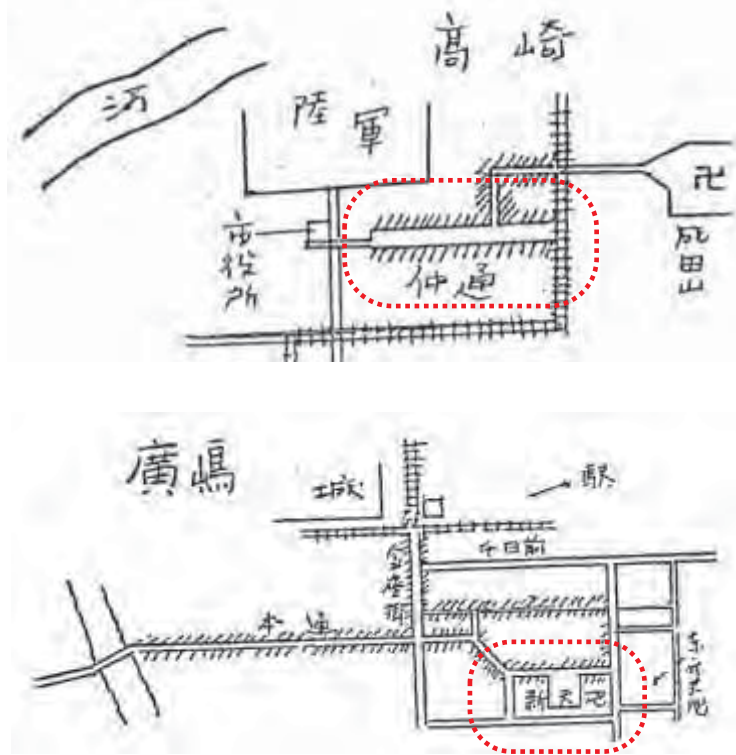
8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(3) 我国の盛り場の空間構成から得たもの

広場乃至広小路のある盛り場

宇都宮、水戸、高崎、甲府、柳ヶ瀬、広島、松本、富山、松江、別府



石川栄耀の盛り場スケッチの一部
「盛り場風土記」、『都市公論』（1938）より

1章

2章

3章

4章

5章

6章

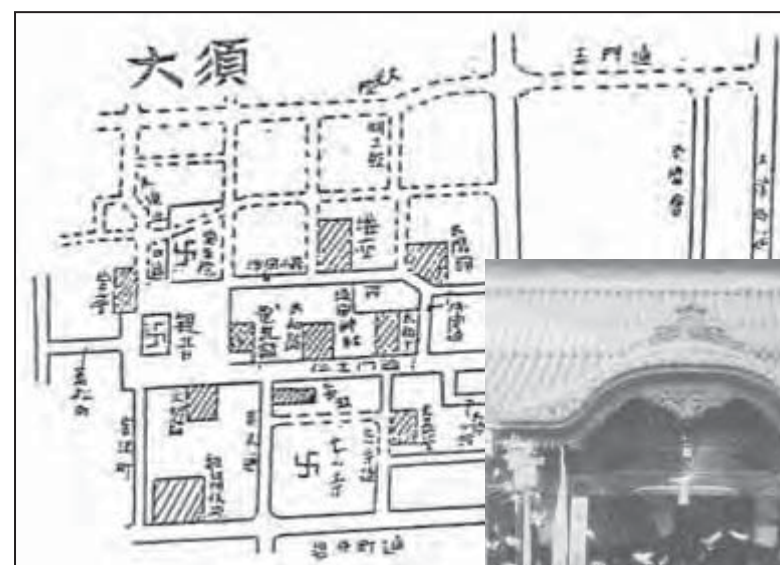
7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(3) 我国の盛り場の空間構成から得たもの

歌舞伎町の広場 幅員15m以上の広小路の一部として見る事ができる



石川による大須のスケッチ「盛り



歌舞伎町広場の様子(1955年頃)

図

日本盛り場にある境内での人々の賑わい
が歌舞伎町の原点だったと考えられる
(映画館で広場を囲むこと)



大須境内の賑わい(1939年)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-1. 石川栄耀の広場設計その原点とオリジナリティ

(4) 小括

西欧広場の空間構成から得たもの



- ・歌舞伎町と麻布十番の広場はイタリア **中世広場**と**同等のスケール**
- ・噴水や広告塔の設置手法は**バロック以降**西欧広場で見られる手法と一致

日本盛り場の空間構成から得たもの



- ・**寺社の境内**を中心とした盛り場や**火除地等**による**広小路**を中心とした盛り場の空間構成と似ていることがわかった
- ・石川の広場設計は、**西欧広場**と**日本盛り場**この2つの影響を見出せる

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

結局、石川は広場創出活動を通じて何を
実現しようとしたのか。

石川の狙いと思想的背景を考察する。

名古屋時代の雑誌『都市創作』に
寄せた石川の全論説を分析



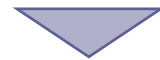
「生産」中心の当時の都市計画を否定

→ 「生活」中心の都市計画へ

「人と人のつながり」こそ

都市計画の中心課題として見出した

→ 結果、「広場」「盛り場」に着目した



石川の言う「人と人のつながり」とは何か

雑誌『都市創作』に寄せた石川栄耀の論説一覧

1925年9月	「郷土都市の話になる迄」『都市創作』1巻1号
1925年11月	「郷土都市の話になる迄(断章の二、夜の都市計画)」『都市創作』1巻3号
1925年12月	「郷土都市の話になる迄(断章の二、夜の都市計画つづき)」『都市創作』1巻4号
1926年1月	「郷土都市の話になる迄(断章の二、夜の都市計画つづき)」『都市創作』2巻1号
1926年2月	「都市の味(「郷土都市の話になる迄」の断章の三)1都市と自然」『都市創作』2巻2号
1926年3月	「都市の味(「郷土都市の話になる迄」の断章の三)2時代相から」『都市創作』2巻3号
1926年4月	「都市の味(「郷土都市の話になる迄」の断章の三)3文化相から」『都市創作』2巻4号
1926年5月	「聚落の構成(「郷土都市の話になる迄」の断章の四)その1人間の巢」『都市創作』2巻5号
1926年6月	「聚落の構成(「郷土都市の話になる迄」の断章の四)その2聚落の発生」『都市創作』2巻6号
1926年6月	「どんたくばなし」『都市創作』2巻6号
1926年7月	「聚落の構成(「郷土都市の話になる迄」の断章の四)」『都市創作』2巻7号
1926年8月	「聚落の構成(「郷土都市の話になる迄」の断章の四)その3聚落の消長」『都市創作』2巻8号
1926年9月	「設計室よりー同じ道を歩む人達の為にー」『都市創作』2巻9号
1926年11月	「聚落の構成(「郷土都市の話になる迄」の断章の四)その4聚落の構成」『都市創作』2巻11号
1926年12月	「交通力学序説(「郷土都市の話になる迄」の断章の五)その1「混雑」について考える」『都市創作』2巻12号
1927年1月	「小都市主義への実際(「郷土都市の話になる迄」の断章の六)」『都市創作』3巻1号
1927年2月	「どんたくばなし(「郷土都市の話になる迄」の断章の七)その1墓のはなし」『都市創作』3巻2号
1927年3月	「どんたくばなし(「郷土都市の話になる迄」の断章の七)その2美しき街路」『都市創作』3巻3号
1927年5月	「市勢一覽の味ひ方(「郷土都市の話になる迄」の断章の八)」『都市創作』3巻5号
1927年6月	「市勢一覽の味ひ方(完)(「郷土都市の話になる迄」の断章の八)」『都市創作』3巻6号
1927年7月	「都市を主題とせる文学(「郷土都市の話になる迄」の断章の九)」『都市創作』3巻7号
1927年7月	「名古屋に於ける土地区画整理の紹介(二)」『中央銀行会通信録』291号
1927年8月	「都市計画学の方角その他(「郷土都市の話になる迄」の断章の十及び断章の十一)」『都市創作』3巻8号
1927年9月	「都市風景の技巧(「郷土都市の話になる迄」の断章の十二)」『都市創作』3巻9号
1927年10月	「都市風景の技巧(「郷土都市の話になる迄」の断章の十二)」『都市創作』3巻10号
1927年10月	「八事讃称」『都市創作』3巻10号
1927年11月	「都市風景の技巧その2(「郷土都市の話になる迄」の断章の十二)」『都市創作』3巻11号
1927年12月	「都市風景の技巧その3(「郷土都市の話になる迄」の断章の十二)及び農村計画のテーマ(同断章の十三)」『都市創作』3巻12号
1928年1月	「都市は永久の存在であろうか(「郷土都市の話になる迄」の断章の十四)」『都市創作』4巻1号
1928年3月	「都市計画街路網の組み方(「郷土都市の話になる迄」の断章の十五)」『都市創作』4巻3号
1928年4月	「市民倶楽部三相(「郷土都市の話になる迄」の断章の十六)」『都市創作』4巻4号
1928年5月	「七都行き・前編(「郷土都市の話になる迄」の断章の十七)」『都市創作』4巻5号
1928年6月	「七都行き・後編(「郷土都市の話になる迄」の断章の十八)」『都市創作』4巻6号
1928年7月	「郷土都市の話(「郷土都市の話になる迄」の断章の終編)」『都市創作』4巻7号
1928年8月	「地価の考察その他((「郷土都市の話になる迄」の断章の追補)」『都市創作』4巻8号
1928年10月	「区画整理設計室より」『都市創作』4巻10号
1928年11月	「大名古屋都市博覧会報告」『都市創作』4巻11号
1929年1月	「都市を捉へる人」『都市創作』5巻1号
1929年2月	「都市社会科課員の研究」『都市創作』5巻2号
1929年3月	「区画整理換地法案自由換地に就て」『都市創作』5巻3号
1929年4月	「区画整理組合事業健康診断の標準其他」『都市創作』5巻4号
1929年5月	「都市を中心とする電鉄会社の健康診断」『都市創作』5巻5号
1929年6月	「都市鑑賞東京巢素描(前編)」『都市創作』5巻6号
1929年7月	「都市鑑賞東京巢素描(後編)」『都市創作』5巻7号
1929年8月	「名古屋都市計画第二次事業に付いての技術的考察」『都市創作』5巻8号
1929年9月	「都市鑑賞・尾張大野」『都市創作』5巻9号
1929年10月	「常識的都市計画法鑑賞(一)」『都市創作』5巻10号
1929年11月	「常識的都市計画法鑑賞(二)」『都市創作』5巻11号
1929年12月	「常識的用途地域鑑賞」『都市創作』5巻12号
1930年1月	「大都市計画へのユートピアとその都市価値」『都市創作』6巻1号
1930年2月	「集団住宅地」設計技巧と経済効果(上)『都市創作』6巻2号
1930年4月	「日本に於ける田園都市の可能」『都市創作』6巻3号

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(1) 石川が捉えた「人と人のつながり」

石川が「人と人のつながり」に着目した背景には
当時の**大都市に対する問題意識**があった

「統計にあらはれぬ故にいわゆる識者なるもの迄それを見のがしてしまふ。
それは即**大都市人間の『人間味』の亡失**である。隣人と隣人の間に必然かも
さなければならない**親愛の心の亡失**である。我々の本能の衷心には『**人なつ
かしさ**』『**話す人なしでは寂しくてたまらない**』『**相手ほしい心**』がある。」

石川栄耀(1927)「郷土都市の話になる迄―断章の六、小都市主義への実際」『都市創作』No.3-1より

◆ 当時の都市をめぐる社会的状況

産業革命による人口の都市集中に伴い、これまでの**共同体意識**が薄れていった

→ 例えば柳田国男など当時の知識人は同様の問題を指摘している

こういった現象は産業革命を経験した世界の国々でも問題とされていた
石川が生涯師事した**イギリスの都市計画家アンウィン**も同様の問題意識があった

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(1) 石川が捉えた「人と人のつながり」

アンウィンは、近代化の中で確立された「自立する個人」に加え、**個々人を横に結びつける**ことが必要と考えていた

⇒ **中世村落共同体**に注目した



アンウィンのイメージする中世村落の風景



Sir Raymond Unwin, 1863–1940

田園都市レッチワースやハムステッド郊外の住宅地設計者として有名。ジッテに多大な影響を受け、中世村落を再評価した。

「**中心性**」と「**閉じた感じ**」(Centers and Enclosed Places)という視覚的構成に着目

⇒ 新たな住宅地設計の空間形成手法として用い、
「**個と集団、われと地域共同社会の一体化**」を図った

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(1) 石川が捉えた「人と人のつながり」

一方、石川は人と人の心理的關係に着目し「都市」を以下のように定義した

石川栄耀にとっての「都市の価値」

内容	用語の定義
都市の価値は賑やかさである	・賑やかさ 賑やかさとは人間が遊樂的施設につつまれ、その気分の中にあつて 集団的気分に酔う事 である

石川栄耀にとっての「都市」

内容	用語の定義
都市とは その中央部に於て周囲に対し 遊樂気分 を確立するに足る施設を有し、此を包む人口が最小限度に於て自然に対立して 人間気分 を確立するに足る文集積せる時その人口、家屋並その為に要する 施設全体 をいう	・人間気分 人間気分とは集団によって 個人の意識を没却し、即心理的個人を滅却し全体としての従つて可成り正直な可成り人類的な気分を醸成した場合その気分をいうのである 。云うなら、都市は個人心理の化合体であり村落は個人心理の混合乃至聯合体である。 ・遊樂気分 遊樂気分とは 実用価値をはなれ、生を楽しむ気分 である。現代都市の基調となっている遊樂は購買に対する賭博的興味である。 ・施設 施設とはそこに集団気分を認識する為にまず 広場乃至広場の變形としての街路 を有し、それが遊樂気分である為にはその広場乃至街路が設備乃至修飾されて居なければならない。

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

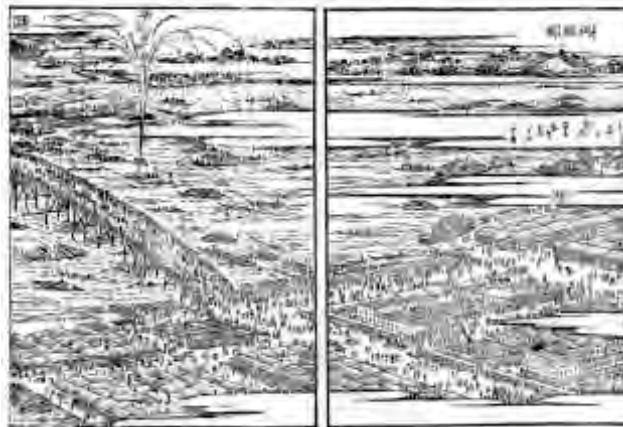
8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(1) 石川が捉えた「人と人のつながり」

石川栄耀およびアンウィンが目指した共同体のキーワード比較

石川栄耀の「人と人のつながり」	アンウィンの理想とした共同体
集団的気分に酔う事(賑やかさ) 個人を減却し全体的気分を醸成 実用価値をはなれ、生を楽しむ気分 ↓ 間接的コミュニケーション (原点は盛り場の賑やかさ)	階級混住 共同庭を介した社会的小集団の形成 Face to faceの親密な関係 ↓ 直接的コミュニケーション (原点は中世村落の共同生活)



我国の伝統的な盛り場の賑やかさ
石川栄耀の原点となった「**集団的気分に酔う**」
人と人のつながり



アングロ・サクソン社会に見られた共同生活
アンウィンの原点となった「**階級混住で共に暮らす**」
人と人のつながり

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(1) 石川が捉えた「人と人のつながり」

石川が目指した「人と人のつながり」



- ・賑わいのなかに身を寄せ、**実用価値から離れて集団的気分に酔う**ことであった
- ・これは、**我国の「盛り場」特有の賑わい**が原点としてあったといえる

「盛り場」につくった「広場」の狙い



- ・**西欧人のアクティビティ**(市民が政治の議論を交す等)を想定したわけではなかった
- ・**広場周囲を映画や劇場で囲むことにより**、「実用価値を離れて集団的気分に酔う」雰囲気を醸成しようとしたと考えられる

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(2) 石川の都市論その学術的背景

人と人の関係(社交)に着目した学術研究の系譜

- ・19世紀後半ドイツ人社会学者ジンメルによって示された

「社交」の定義	「社交」の社会的意義
関係そのものを楽しむ関係 何か獲得すべき目的や利害に左右された関係ではなく、純粹に他者との関係を味わい、楽しみ、享受しあう関係	社交はたんなる暇つぶしや贅沢ではなく、人間が人間らしくあるために不可欠の営みであり、 社会そのものを形成する根源的な作用の一つ



ゲオルク・ジンメル(1853-1918)

- ・ジンメル以後、R.E.パークを中心とする**シカゴ学派**に受け継がれた
- ・日本では奥井復太郎、磯村英一らによって「**都市社会学**」という研究分野に受け継がれた
- ・石川栄耀は**奥井、磯村両氏**と戦前から交流があった
- ・また、1930年前後には**米田庄太郎**(社会学)を通じてジンメルを知っていた

⇒「人と人のつながり」から都市を捉える石川の視点は
同時代の知的水脈のなかから影響を受けていたといえる

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(3) 「盛り場」研究をめぐる社会的背景

封建社会において、人々が自由に集り話し合うような場所はご法度であり、江戸の火除地に出来た**盛り場は常に取締りの対象であった**。伊藤好一(1987)「江戸の町かど」

当時、この「**盛り場**」はどのように捉えられていたのか。

「商店街盛り場の価値－

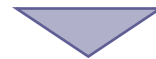
恐らく、総ての人は、此を**単なる買物中心乃至歡樂的な低きものと考へ易い**。

自分は、此の研究を為していると云ふだけで、何となく**不当に、輕められた事がある**。」

石川栄耀(1938)「主題主義地方計画の提唱」『都市公論』No.21-6より

「次で、盛り場の問題ですが、実に都市計画七不思議の一つとして、此が実に存外の存外と思ふ程、**都市計画界に理解されて居らない。盛り場と云ふと、何か君子人のふれ可からざるものの様に考へてゐる**。此は実に残念だと思ひます。」

石川栄耀(1947)「新都市の構法」『新都市』No.1-1より



このように、石川の「**盛り場**」研究は世間から大手を振って迎えられたわけではなかった

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(3) 「盛り場」研究をめぐる社会的背景

i. 中村綱による石川「盛り場」研究批判

中村綱は、1933年愛知県都市計画地方委員会技師に配属、石川の後任者
1935年、中村は『都市公論』に「盛り場研究の吟味」と題した論説を発表した

「人文地理学に於いては環境が支配的であると主張する。石川氏の議論も多くは人文地理学的である様に拝察する。(略)都市研究の方法は経済地理学でなければならぬ」[1]

「盛り場だから交通量が多いのではなしに交通量が多いから盛り場となったのであるものを逆に車行速力の制限等は本末転倒である」[3]

「盛り場は如何にも華々しく且つ研究対象として容易である。然しその研究価値は左程高いものではない。(略)只あるとすれば小売商業者の保護である。しかし百貨店進出の今日大資本の前には小売小商店の没落はやむを得ないのではあるまいか。」[4]

「石川氏の言われる盛り場の照明は夜の美化にある。之亦都市計画としては可成末の事であり寧ろ交通安全のための街路照明こそ意義あるものの如くである。」[5]

中村綱(1935)、「『盛り場』研究の吟味」、『都市公論』No.18-5より



中村は、都市計画にとって盛り場研究の意義はそれほど高くなく、むしろ他にやるべきことがあるのではないかと主張した。

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(3) 「盛り場」研究をめぐる社会的背景

i. 中村綱による石川「盛り場」研究批判

都市計画家のやるべきこと

「産業の発達を計り且つ消費者＝都市居住者の生活の不便を計るのである」

⇒ 中村は生産を都市計画第一の目的と考えていた



これら、石川の後任者である中村の批判は、石川の都市計画的な位置とともに、当時の盛り場に対する考えの一側面を照射しているといえよう。

⇒ すなわち

石川の「盛り場」研究は後任者が専門雑誌に疑問を呈するほど理解しがたく、また、石川が都市計画技官の本務を超えて活動しなければならないほど都市計画における盛り場の位置は低いものであり、主流ではなかったといえる。

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

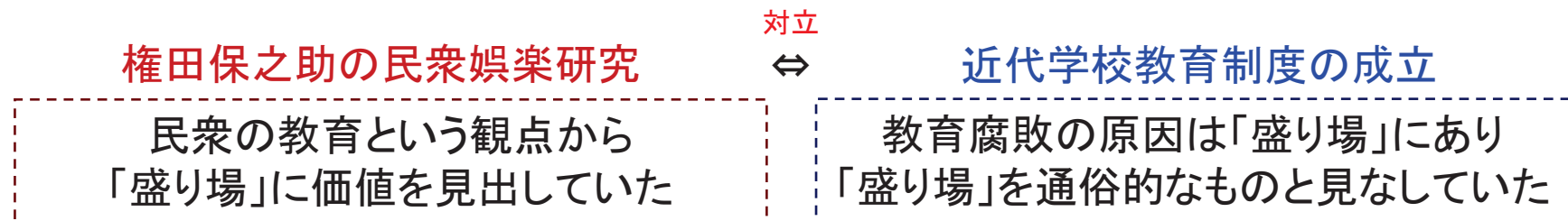
(3) 「盛り場」研究をめぐる社会的背景

ii. 民衆娯楽研究の台頭

当時(大正中頃)、「盛り場」に価値を見出す学術研究が存在した。

「盛り場」研究の嚆矢である権田保之助による民衆娯楽研究である。

吉見俊哉(1987)「都市のドラマトゥルギー」より



知識偏重、概念重視、偏狭な教育対象と教育主題など**学校教育の矛盾を指摘**

⇒ 権田は**娯楽従業者**との提携・連帯を呼びかけ、独自の運動を展開した

「諸君等の**民衆教育**は遥かに**広き実社会**を背景としつつある**活ける教育なり**ということ誇らなくてはならぬのである。(略) 学校教育者の教育は行くところまで行って既に行き詰まっている。」

権田保之助(1921)「民衆娯楽問題」より

1章

2章

3章

4章

5章

6章

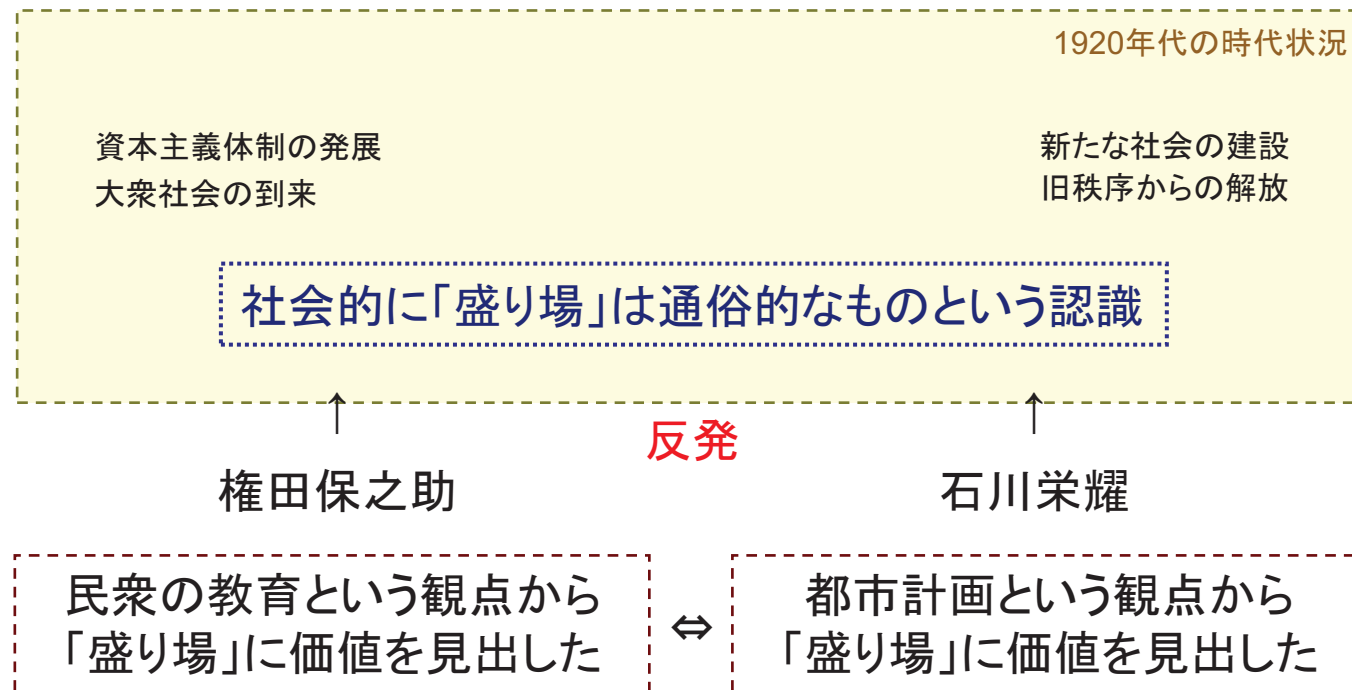
7章

8章

7-2. 石川栄耀が目指した「人と人のつながり」とその背景

(3) 「盛り場」研究をめぐる社会的背景

ii. 権田保之助による民衆娯楽運動



権田と石川が同時代に異なる分野から「**盛り場**」の価値を主張した背景には、社会的に「盛り場」が通俗的なものと見なされていく時代状況があったといえよう

7章の小括

以上、本章では以下の作業を行った。

1. 石川の広場設計の原点を西欧広場と日本盛り場から探った
2. 石川が目指した「人と人のつながり」を明らかとし、その社会的背景を探った

ポイントは

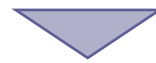
- ① 石川の広場設計には、西欧広場の設計手法のみならず、日本の伝統的盛り場にある境内や火除地などの空間構成からの影響が見出せる。
- ② 石川が捉えた「人と人のつながり」は、賑わいのなかに身を寄せ、実用価値から離れて集団的気分に酔うことであり、それは我国盛り場特有の賑わいが原点として考えられる。
- ③ 社会的に「盛り場」が通俗的なものと見なされるなか、石川は「盛り場」の社会的価値を再評価し、都市計画の主流とすべく、技官の本務を超えた活動を重ねた。その都市空間に対する実践が石川の広場創出活動であった。

8章

まとめ

8章 まとめ

- ・法定都市計画における「**広場**」の扱い
「広場」⇒「**交通広場**」へと意味が矮小化
- ・石川栄耀が求めた「広場」⇒「**人と人が集り交歓する広場**」
- ・**生産優先の都市計画**を批判し、技官の本務を超えた活動を行った

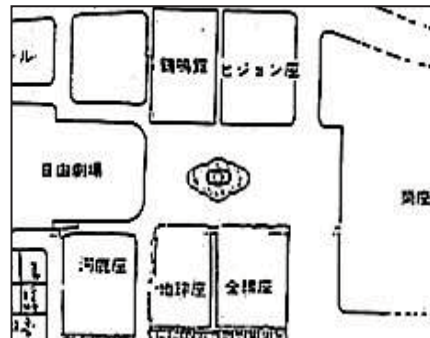


- ・これまで**歌舞伎町**の事績を除いてこれらの活動が注目されることはなかった
- ・歌舞伎町の事績においても「**ロマンチスト**」で「**ユニーク**」な石川の個人的理想が実現したという程度の意味合いで捉えられてきた
- ・**石川はなぜ「広場」をつくったのか**、その本質的な問いは不問に付されてきた

⇒ このような研究的状況を鑑み、
都市広場をめぐる石川栄耀の活動を明らかにした

石川栄耀の広場創出活動

- ・1919年、旧都市計画法が制定され、東京帝大土木学科を卒業した石川は**内務省の都市計画技師**として採用された。
- ・主なフィールドは、名古屋(1920-1933年)と東京(1933-1951年)であった。
- ・石川が実践活動で創出した広場は、3つの区画整理事業で確認できた。



歌舞伎町広場(計画)



麻布十番広場(実施)

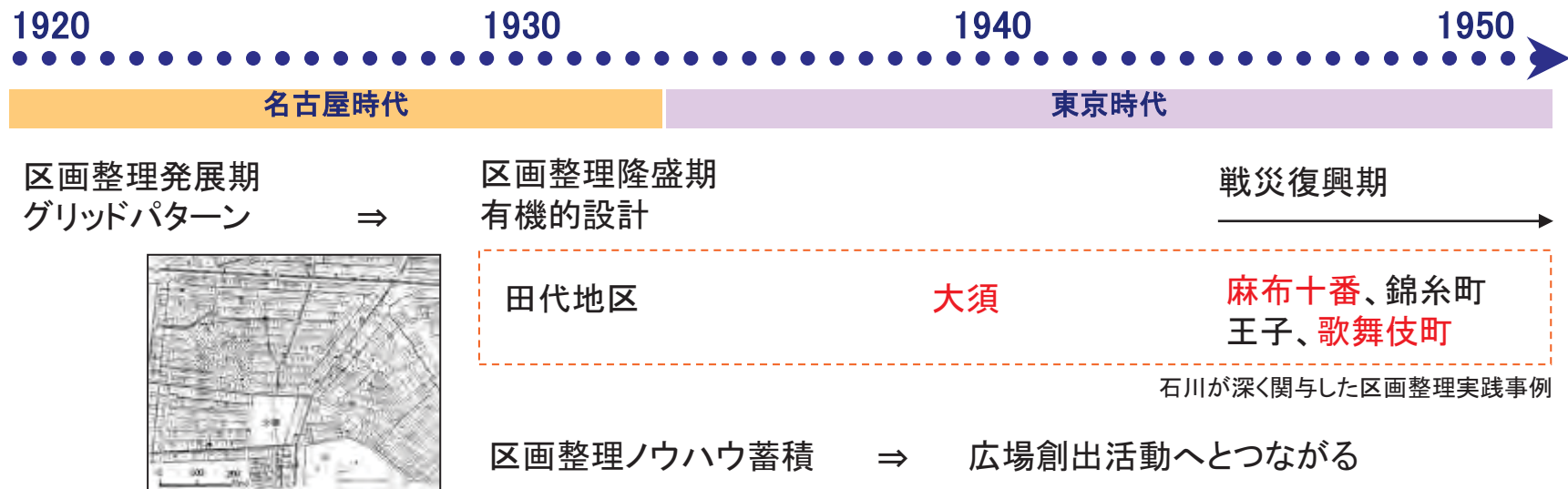


大須広場(計画)

- ・事業上、区画整理事業の**減歩によって生じた公共用地**を用いて創出された。
- ・石川の創出した広場は、結果的に「**道路**」として道路法によって管理され、現在に至っている。

石川栄耀の広場創出活動、事業上の位置付け

- ・これら石川の広場創出活動は、区画整理事業のなかでも極めて珍しい。
- ・石川の名古屋時代は区画整理発展期であり、ここでノウハウが蓄積された。
- ・戦前から戦災復興にかけて、全国的にも区画整理を通じた様々な試みがなされた時期であった。
- ・しかし、1954年の土地区画整理法制定、ガソリン税による補助金導入などにより、区画整理は土地投機の側面が色濃くなり、以後、画一的な設計が多くなる。



1章

2章

3章

4章

5章

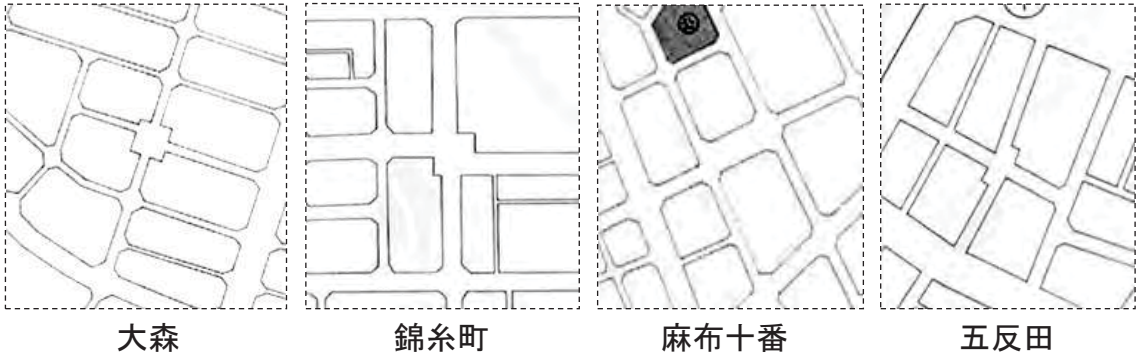
6章

7章

8章

東京戦災復興計画における同様の試み

東京戦災復興区画整理事業のなかで
歌舞伎町や麻布十番で創出されたような広場状空地が、
大森、錦糸町、池袋、五反田の4地区で確認できた。



これらの地区は麻布十番含め、
全て第1次施行区域(優先地区)の事業であり、
第2次以降で広場状空地(駅前除く)は確認できなかった。

⇒

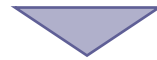
これは、1950年に改正された区画整理や相続税等の
土地評価方式整備時期との兼合いが考えられる。

東京戦災復興区画整理事業地区一覧

順 序	地 区	区 画 名	面 積(坪)
第1次	1	港区麻布10番町付近	120,228
	2	新宿区新宿1、2、3丁目および西谷付近	131,106
	3	文京区教育大学付近	141,392
	4	墨田区錦糸町駅前側	103,576
	5	品川区五反田駅付近	101,099
	6	品川区大森駅東側	177,872
	7	大田区大森駅東側	125,336
	8	渋谷区渋谷駅付近	139,225
	9	新宿区新宿駅付近	243,498
	10	豊島区池袋駅付近	245,212
	11	北区王子駅付近	156,333
第2次	12	大田区蒲田駅西側	316,291
	13	豊島区大塚駅付近	399,637
	14	板橋区板橋1、2、5丁目付近	164,318
	15	江東区亀戸駅南側	142,700
	16	江東区亀戸駅北側	310,473
第3次	21 の 1	新宿区早稲田橋西側	168,171
	23 の 1	新宿区高田馬場駅付近	55,631
	24 の 1	文京区駒込神田駅付近	113,732
	25 の 1	墨田区向島岸上町付近	33,400
	26 の 1	品川区大井町駅付近	99,404
	30	杉並区高円寺駅付近	160,206
	31 の 1	豊島区巣鴨駅付近都電西側	173,223
	32 の 1	豊島区駒込駅付近	68,495
	33	北区赤羽駅東側	90,946
	34 の 1	荒川区日暮里駅北側	130,467
	37 の 1	板橋区板橋3丁目付近	37,840
	40 の 1	新宿区柏木5丁目戸山ヶ原付近	136,295
	41	大田区蒲田駅東側	90,207
	計		14,335,425
組 合	麻 布 地 区	港区麻布六本木付近	45,350
	南野川谷橋地区	板橋区板橋駅東側	70,400
	原 比 寿 地 区	渋谷区恵比寿駅付近	158,000
	新 宿 地 区	新宿区歌舞伎町付近	29,937
	田 端 地 区	北区田端駅付近	251,505
	西大久保地区	新宿区都立大久保駅西側	47,345
	代々木地区	渋谷区代々木八幡駅付近	141,109
新 井 地 区	中野区新井薬師付近		138,549
	計		882,195
合 計			5,217,624

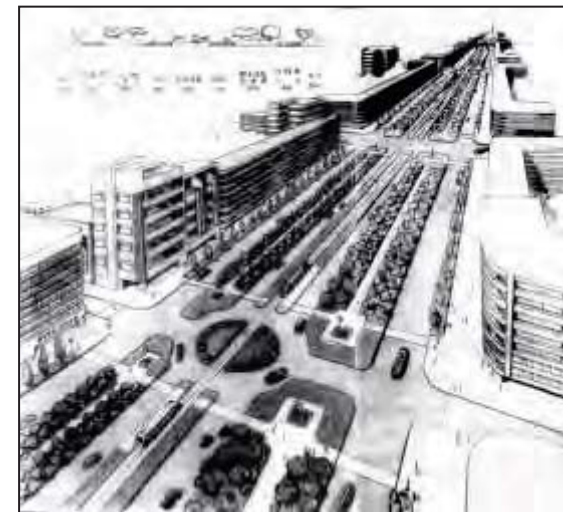
石川栄耀の広場創出活動、東京戦災復興計画における位置付け

- ・東京戦災復興計画は石川の最大の事績として多くの研究がある。
- ・東京戦災復興計画は当初の計画のほとんどが削除されたため、
石川の100m道路計画や緑地計画は実現しなかったという事実が注目されてきた。



- ・しかし、それはマクロな視点で捉えた事実であって、麻布十番の広場状空地のように、
わずかに実施された区画整理事業において、石川の計画は実践されていた。

- ・しかし、東京戦災復興計画において、
「商業地のなかに広場をつくる」という石川の試みが
明文化されることはなかった。
- ・東京戦災復興計画でいう「広場」は
広幅員街路の一部と駅前広場を指していた



東京で計画された100m道路のイメージスケッチ

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

石川栄耀の広場設計思想

広場のある都市

- ・文化の進んだ都市
- ・市民生活が民主的に高揚された都市

日本の都市

- ・歴史的に友愛の都市計画をしてこなかった事を指摘
- ・今後の都市計画において第一の問題点として認識

- ・石川は、1930年前後から**日本に広場がないことを指摘し嘆いていた**
- ・同時に「**日本に広場をつくっても果たして育つのだろうか**」という疑念を抱いていた

⇒ 一方、社会的機能(市民交歓)において **西欧広場** ≡ **盛り場乃至商店街**



「これなら広場がなくとも一応許せる」としながらも、石川は**形としての広場**にこだわった

⇒ 日本の伝統的な盛り場
寺社の境内や火除地等の広小路を核として発展してきたとする歴史的事実に由来

西欧広場の設計手法

日本盛り場の空間構成

石川はこれらの手法を適宜活用して商業地のなかに広場を創出したといえる

1章

2章

3章

4章

5章

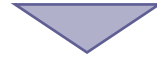
6章

7章

8章

石川栄耀の目指した「広場」「盛り場」そして「人と人のつながり」

- ・石川は「人と人のつながり」を日本都市計画の中心課題として絶えず主張していた



- ・当時の生産中心大都市優先の法定都市計画に対する石川のアンチテーゼでもあった
- ・また、産業革命による人口の都市集中に伴い、これまでの共同体意識が薄れていった当時の社会的状況もあったと考えられる

- ・石川が目指した「人と人のつながり」
賑わいに身を寄せ実用価値から離れて集団的気分に酔うこと
- ・石川の原点
我国の伝統的盛り場における「集団的気分に酔う」賑やかさ
- ・石川は、日本に民主的市民社会が成立していないこと、
および、その象徴として広場がないことを嘆いていたが、
実践活動として「盛り場」につくった「広場」では、
西欧人のアクティビティを想定したわけではなかった



大須境内の賑わい(1939年)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

都市広場をめぐる石川栄耀の活動

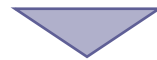
都市計画のなかで、とかく石川は「**ロマンチスト**」「**ユニークな人**」として捉えられてきた

石川の「**盛り場**」研究 ← **道楽研究者**として一部から批判されていた
都市計画は**都市の生産性向上が最大の仕事**
社会的にも「盛り場」は**通俗的なもの**と見なされていた

石川は、生産性向上という社会的役割を担っていた都市計画の現状に満足せず、常に**人々の生活にあるべき都市計画の姿を求めている**。

⇒ 「**ロマンチスト**」「**ユニークな人**」とする評価

欧米主流、生産中心とする日本の都市計画のなかで
石川の「盛り場」研究は、都市計画のスタンダードにはなりえなかった



しかし、石川は決して独自の考えで理論を構築した特異な人物ではなかった

石川は**ジッテ**や**アンウィン**の流れを汲み、
自国の共同体がもつ伝統的な形態を再評価した人物であり、
それは都市広場をめぐる一連の活動において試みられたのである

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

石川栄耀の限界と可能性

以上、本研究で得た知見および考察をまとめた。
最後に「石川栄耀の限界と可能性」と題して筆者なりに石川を評価する。

◆ 結局、石川は西欧広場を導入しようとしたのか



「形」 西欧広場の空間形成手法、日本盛り場の空間構成

「内容」 実用価値を離れ集团的気分に酔う「人と人のつながり」

西欧広場を導入したかったのか ⇔ 日本盛り場をつくりたかったのか

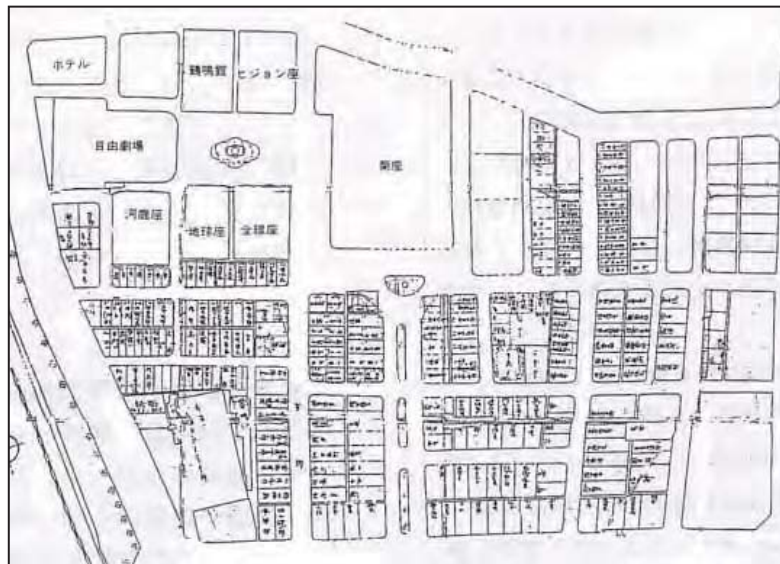
石川のなかで「対立」するわけでもなく「共存」していた

→ ここに石川の限界と可能性が見出せる

石川栄耀の限界と可能性

限界 西欧広場の「形」を導入するために
区画整理事業により「道路」の一部として「広場」を創出したこと

1. 区画整理事業という事業手法の限界
2. 結果的に道路法に管理された「道路」であったこと
3. 広場の「形」を商店街が使いこなせなかったこと



1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

石川栄耀の限界と可能性

可能性 「人と人のつながり」をつくるため
人が自然と集る我国の盛り場乃至商店街に着目したこと



復興小公園

近代教育制度を背景とした小学校と併設
運動、遊戯、集会

→極めて理想的な人間像



歌舞伎町広場

通俗的とみなされた盛り場内に配置
賑わい、興奮、楽しみ

→欲求に根ざした人間像

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

◆ 現代における都市の「公園」は果たして人と人が自然と集る場所たりえているか

→ 白幡洋三郎(1991)「公園なんてもういない」中央公論

現代公園の共通イメージ

- ・ **周辺環境との隔絶**
(道路、柵、植栽で周囲を囲む)
- ・ **土、砂、草木等の自然物で構成**
(周囲の人工的都市環境との対比)
- ・ **昼間利用を想定**
(夜は閉鎖する公園もある)
- ・ **基本的に商業施設は規制**



◆ 現代における都市の「公園」は果たして人と人が自然と集る場所たりえているか

→ 白幡洋三郎(1991)「公園なんてもういない」中央公論

現代公園の共通イメージ

- ・周辺環境との隔絶
(道路、柵、植栽で周囲を囲む)
- ・土、砂、草木等の自然物で構成
(周囲の人工的都市環境との対比)
- ・昼間利用を想定
(夜は閉鎖する公園もある)
- ・基本的に商業施設は規制



我国の屋外における「社交」の楽しみ方(現在は円山公園)

かつて我国には「飲み食い」を主体とした屋外の楽しみ方はあった。
石川が求めていた「広場」とどこか似ている。

石川栄耀の限界と可能性

石川の手法が現代に有効かどうかは全く別問題

重要なことは、石川の視点

「公園」は「公園の問題」 ⇔ 「商店街」は「商店街の問題」

別々の問題ではなく「人と人のつながり」の問題として総体的に捉えたこと



石川栄耀(1893－1955)

- ・日本の都市計画成立期を支えた都市計画技官の1人
- ・法定都市計画内の華々しい業績

→ しかし、「法定都市計画ではいい都市はできない」として葛藤し悩みながらもわずかに実践した活動があった

このわずかな実践に込められた意味を我々は見直さなければならない

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

今日のテーマ

石川栄耀が見た近代日本都市計画 ー都市広場をめぐる活動を通じてー

石川栄耀は生産中心ではなく生活中心の都市計画を目指し、
「人と人のつながり」から都市を再定義した。

しかし、都市計画の主流には成り得ず、
石川の技術・手法も一般化しなかった。

⇒ 「大正以後の都市計画はコントロール型で、誰がどういう思想を込めて
どんな都市像をイメージしているのかわからない」
「“像”による街づくりから“法”による街づくりへ」
(藤森照信『明治の東京計画』2004)

⇒ しかし、現代は新たな局面を迎えている。

『公正さが求められる法によるガバナンスから
達成されるべき全体像を共有するまちづくり運動へ』